
希望という名の絶望

未田 尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希望という名の絶望

【Nコード】

N3600K

【作者名】

未田 尚

【あらすじ】

先が見えずに足掻き続けなければならない希望と、受け入れさえすれば全て終わる絶望。

どちらが本当の幸せなのだろう。

なんて難しいことは置いといて、バカが巨大ロボットに乗ると周囲が苦勞するという物語です。

暇を見て更新していきますが、時間がかかると思います。

HPではすでに完結していますので、早く続きが読みたい方はそちらへどうぞ。

<http://kthp.com/hp/nyanya/kibou>

序 神成 勇人

序 神成 勇人

手を、延ばす。

頭上、遙かな高みにあるそれに。手が届くような距離ではないことはわかってる。でも届きそうだと思ってしまう。それが何かはわからない。でも、自分にとってとても重要で、どうしても手に入れなくてはならないものだという事だけはわかる。

だから、手を延ばす。何度も手を延ばし、それでも届かなくて、掴む手は空を切ることを繰り返すだけなのに、それでも諦めることもできず、何度でも。

あるいのは、何かの拷問なのか。届くような気がするのに届かない。永遠の徒労、しかし一筋の希望。それがあがるがゆえに、やめることは出来ない。あの葡萄はすっぱいのだと、そう諦めることが出来さえすれば、楽になれるというのに。それでも、また手を延ばす。

パンドラの箱に詰められていたのは災厄。その中にあった、たった一つの希望。箱の中に、他の災厄全てが出切ってしまったてもまだ残るほどに深い最奥にしまわれていたもの。封印の箱の中で、更にパンドラに『出す』という契約を結ばせなければ出ることすら出来なかったほどに強い封印をされたもの。それが、それほどに嚴重にしまわれていたものが、他の全てを凌駕する最悪の災厄ではないと、どうして言い切れるのだろうか。

それでも手を延ばす。今度こそは届きそうな気がする、届きそうな気がするという以上の理由などないその希望へと向かって。

あと、もう少しで届く。もう少し、あと、もう少しだけ……

1 - 1 みのり 1

「あなたは怒るかしら、それとも泣くのかしら」

歌いながら階段を上がる。曲名は知らない。最近なんとなく耳について、何気なく歌ってしまうのだ。

それにしても本当に二度手間だ。部屋は隣なのだから起きてすぐに起こしに行く方が楽なのだけれど、起こした後に朝食の準備などしていると間違いなく二度寝するから仕方がない。ノックもせずに部屋のドアを開ける。

男の子らしい、乱雑に散らかった部屋。他の男の部屋などは知らないが、恐らく一般的な男性の部屋だと言えると思う。違いがあるとすれば、この年頃にしてはヒーロー物のポスターやグッズが少し多いくらいか。

ベッドを覗き込むと、案の定勇人は呑気に寝こけていた。

その呑気な顔を見ている内にイライラしてきた。こちらの気も知らずに、平和そうに寝ているこの無神経。布団をめくる。当たり前のようにこの程度では起きない。どうせ普通の方法では起きる訳がない。

私は右足を大きく上げて、

「いい加減に、起きなさい」

躊躇わずに踵を鳩尾に落とした。

「っ！」

声にならない悲鳴、続けて鳩尾を押さえてのた打ち回る。

その様子を気にも留めずに私は布団をまとめ始めた。

「毎朝毎朝、起こす方の身にもなってみなさい。いちいち面倒をかけるいでほしいんだけど」

「あ……の、ですね、みのりさん。毎朝、そのまま目覚めなくなるような起こし方は止めてくださいとあれほど……」

いまだに鳩尾を押さえて咳き込み続けているこいつの名前は神成

勇人。私ことみのりのひとつ年下の幼馴染…… と言うには少し事情が入り組んでいる。

「そんなに嫌なんだったら、一度くらい起こされる前に起きてみなさい。そうすればそんなことにはならないでしょう？」

「それが出来れば苦労しないんだけど」

ようやく収まったのか、勇人はお腹をさすりながら立ち上がった。

「……なんか、変な夢見ててさ」

「何、その命より大事な夢っていうのは」

聞きながら、布団を抱えてベランダへ出る。今日もいい天気だ。

雨が降る気配もないし、帰ってくる頃には布団はふかふかになっているはず。

「それが、覚えてないんだよ。毎朝おんなじ夢だってことだけは確かかなんだけど」

「覚えてないのに、どうしてそれが同じ夢だってわかるのよ？」

後ろの方で勇人がごそそと着替えている気配がする。お互いにそんなことくらいは気にしない。

「いや、夢の中でさ、またこの夢だ、とか、今度こそ、とか思っているんだ。……覚えてないのは、多分夢より強烈なことが毎回あるからじゃないかなと思うんだけど」

「ふーん。強烈なことって、なによ？」

笑いながら振り返る。につこりと。途端に勇人はビツと気を付けの姿勢になった。この素直さは私の教育の賜物。

「いえ、あのなんと言うか……今日は水色のストライプかぁ、とか」
微笑む。我ながら見事な満面の笑み。

「……あえて、言うわ。貴方バカでしょう？」

言葉とともに、勇人の顔面に正拳を叩き込む。鼻血が見事に放物線を描き、勇人は再びベッドに倒れこんでいた。

「……しまった。また起こさなくちゃだわ」

そのままぴくぴく痙攣を始めた勇人を見下ろしながら、私は小さく溜め息をついた。

いつも通り勇人と二人、すでに朝食の準備済みの食卓に付く。

「……何？ 食べないの？」

何故か勇人はお腹を押さえて食卓にうずくまったまま。

「……鳩尾に踵・正拳・もう一度踵とくらってメシが食えるほど頑丈に出来てないでス……」

「二度寝なんてするからでしょう」

「……二度目は寝てた訳じゃないんだけど」

勇人を無視して味噌汁を啜る。今朝はいつもと違う、頂き物の出汁使ってみたのだけれど、それ程悪くない。たまに使ってみてもいいだろう。

歪んだ表情のまま、勇人も味噌汁の椀を手を取った。食欲が出たからと言うよりは、多分意地で。

その勇人が、味噌汁を一口啜って、少しだけ表情を変えた。

「みのり、味変えた？」

「ええ、出汁を変えてみたの。気に入らなかった？」

少し驚いた。大雑把……というか適当……というか「馬鹿」な勇人が、出汁を変えたくらいのことに気付くとは思っていなかったから。

「いや、これはこれでおいしいけど。でも、いつもの方が安心出来ていいかな」

「そう」

まあ、勇人がそう言うのなら出汁はいつものを使うことにしよう。珍しく他人に気をつかえたご褒美代わりに。

「そう言えば、昨日電話があったわ。叔父様から」

なるべく淡々と言う。勇人がこの話に微妙な思いを持っているのが分かってるから。

「親父から？ あの野郎、実の息子と話す気もないのか」

「何言っているのよ。起こしに言ったのに、貴方ぐうすか寝てたじゃない」

「……ソウデスカ」

実際、勇人は良く眠る。八時前にはもう寝ているし、聞いた話では学校でも授業中起きている事はほとんどないらしい。学校ではともかく、家で良く寝ているのは手間がかからなくていいのだけれど、「とりあえず、向こうでは何も変わったことはないって。元気でいるからって伝えてくれっていう事と……それと、こっちからかけても起きてたためしがないから、たまにはそっちからかけて来い、って」

「……そか」

叔父様……勇人の父親が出張に出てから、勇人は私のたったひとりの家族になった。

家族と言うと正確ではない。私は、叔父様の養子にはなっていないのだから。

物心が付く前だから他人事だけれど、まだ幼い頃に私の両親は事故で死んだ……らしい。その親友だった叔父様に、身寄りのない私が引き取られたのはそれほど不自然な流れではなかったと思う。叔父様は一本気で、困っている人を見過ごせない性質だから。

その性質は勇人にも受け継がれている。両親がいないことでよくいじめられていた私を助けてくれるのは、いつも勇人の役目だった。誕生日が三ヶ月早い私が先に小学校に上がってからは、それも少なくなっただけ。

やはり親子は似るのだろう。そう言うと、勇人は複雑そうな表情をする。

「……そろそろ、行かなくちゃね」

時計を見て立ち上がった。そろそろ家をでなければ間に合わない時間だ。今年から私は近くの職場で働いていた。一応公務員……という事になっている。

「じゃ、私は仕事に行つて来るけど。貴方もたまには外に出なさい。散歩程度でいいんだから。ヒッキーにだって太陽は必要なのよ？」

「ヒッキーじゃないってば」

まだ学生の勇人は現在夏休み。だからといって家にこもり切りと
いうのは当然良くはない。

「最近、トレーニングもしていないでしょう？　少しくらい身体を
動かしておきなさい」

勇人はバカだ。どのくらいかとかいうと、進路調査の第一志望か
ら第三志望まで全てに『正義の味方』とか書いてしまうくらいバカ
だ。何時頃からそんなことを考え始めたのかはよくわからない。で
も、恐らくは子供の頃に私を守らなくてはと思っていた気持ちを今
も忘れていないとか、そんなことだろうと思う。ひとつのことを考
え始めると他のことに目がいなくなるくらいバカだから。

だからというべきか、当然のように勇人は格闘技をしていた。か
なりの腕前なのも知っているし、喧嘩の類で負け無しなのも知って
いる。なんと言ってもバカなので、どんなにボロボロになっても勝
つまで止めないから。

でも。最近、トレーニングも休みがちだった。悩んでいるのだ。
バカなりに。

今年は卒業、どうするのかを決めなくてはならない。周りからは
警察官を勧められている。でも、勇人のなりたいのは警察官ではな
くて『正義の味方』なのだ。勇人の性格なら、きっと警察官になれ
ばそれなりにやりがいを感じるだろう。もしかしたら、生きがいす
ら感じるかもしれない。でも、一本気な勇人は、それで良いのかと
自問を続けているのだ。

勇人はバカだ。でもそれは適当で無責任なバカではなく、損得よ
りも一度決めた事をやり抜くことを優先させるバカなのだ。

「そつだなあ……じゃ、俺も一緒に出るよ」

勇人も立ち上がる。自分で食器を台所まで運ぶのは、ささやかだ
けれど大事なところだと思う。

「確かに鈍ってるっぽいし。公園でちょっと運動でもしてくるかな」

総合公園は、ここから歩いて10分くらいのところにある。テニ

スコートなどの野外運動施設があるそれなりに大きい公園で、川に面していることから遊歩道なども備えている。運動しなくても、ぶらぶら時間を潰すにはいい場所だろう。

洗い物は帰ってからするので、二人並んで玄関をくぐる。途中まで方向は同じ。少しの間だけ一緒に歩く。

「何も無ければいつも通りに帰るわ。先に言っておくけど、久しぶりの運動だからって、無茶したり怪我とかしないようにね？」

「大丈夫だって。道場に行くならともかく、軽く運動するだけだから怪我しようもないし」

そう言って笑う勇人の表情を見詰める。こう言っただけでも、無茶をするのだ、コイツは。

何を言おうかと考えているうちに公園への分かれ道についていた。私の職場はここから真っ直ぐ。

「それじゃ、みのりも気をつけて」

特別何かを感じた風も無く、手を振って勇人は歩き始めた。

いや、それが当たり前なのだ。毎日繰り返されて来た光景。特別な事など何も無い。

それでも、私は去って行く勇人の後姿をしばらく見送ってから、歩き始めた。

さあ、仕事だ。気合を、入れなくては。

いつもの職場、自分の席に座ると気が引き締まる。

国立二足歩行ロボット開発・運用研究機関『コーカサス』。作戦部司令室オペレーターというのが私の職務。簡単に言えば、ロボットの状態監視と操作する担当者への指示をする役というところだろうか。

「うーおはよー」

軽い挨拶とともにだらしなく着崩した制服姿の女性が入ってきた。コーカサスの総括責任者、高松司令。まだ若いのにこの地位にっているのは凄いことだと思う。だらしな性格をしているが、そ

れはだらけているからではない。

「司令、昨日も泊まりだったんですか？」

司令はここに泊り込むことが少なくない。基本的に『機体』の稼動時以外は時間の取れるオペレーターと違い、司令の職務内容は多岐に渡る。本人は「要するに雑用なのよ」と笑うが、他の者に勤まるような内容のものはひとつも無いことは知っている。

「そー。『機体』が完成したばかりでしょ？ 上への報告とかー、報告とかー、報告とかー、色々あるのよねー」
「はあ」

司令と呼ばれていても、所詮は中間管理職なのだ。規模が大きい分だけ責任が大きくなっているだけで。そもそも、司令は報告とかの『しなくても現場で困らない仕事』が苦手だ。細かい仕事が嫌いとか苦手とかではない。もっと細かい予算計算書などにもきちんと目を通している。恐らく、部下のためではない仕事が嫌いなのだ。もっとも、報告だけしか仕事が無い訳ではない。明日は完成した『機体』の試運転が予定されている。それに伴う雑務等も勿論重要案件なのだ。

「そういえば、植村中尉は今日は自宅待機でしたよね？」

司令に確認する。

「そうだったけ？」

「はい。明日は初の起動実験だから今日はゆっくり休むようにと、司令が」

「あー、そういえばそんな事言った気もするわ。……で、中尉がどうしたの？ 何か嫌なことでもあった？」

私の口調で察したのだろう、流石に司令は鋭い。とは言っても特別何かあったという訳ではないのだけれど。

「いえ。ただ、中尉は私達一般学校出身者に対して偏見があるようなんです。いない日は気が楽だと」

「あー、確かに。ちよっとエリート意識が強いというか、ね。そう言う話もよく聞くんだけれど、みのりちゃんまでそう言うんじゃないか何か

対処しといった方がいいかもね」

「いえ、そこまでのことではありませんので」

「でも、みのりちゃんってそういう誰が嫌いとかいう話、ほとんどしないじゃない？　みのりちゃんがそういう話をする時ってというのは、他の所員にとっては限界に近い時なのよね」

確かに、私はそういう人間関係とかは気にしない方だ。子供の頃に孤立することが多かったせいだろうか。

「それに、操縦席に座る中尉と直接話するのはオペレーターのみ
のりちゃんな訳だし、その本人にそういう意識があるんだったら、
そのままにはしておけないしー」

司令は机に突っ伏したまま、立てた右腕の指を一本立てて、揺する
ような文字を書くような不思議な動きを始めた。これは司令が考
えごとをしているときの癖。早速植村中尉の事について考えている
のだろう。

「でも司令、お疲れなのでしょう。たまにはきちんと休養を取らな
いと、お体が持ちませんよ」

「分かってるんだけどねー。もう若くないんだしー。……ってみの
りちゃん、もしかしてそれが言いたかったのかな？」

からまれた。顔を上げてこちらを睨んでいる。酔っ払っているの
だろうか、この人は。あるいは睡眠不足でハイになっているのかも
知れない。その気持ちもわからないではないけれど。

「司令は十分若いじゃないですか。でも、いくら若くても無茶はよ
くありませんから。今は良くて、後になって後悔することになり
ますよ？」

「うう、もっともなお言葉。私に少しでも時間をください」

なんだか良くわからない台詞を吐いて、司令は再び机に突っ伏し
た。やはり疲れているらしい。気の毒だとは思うが、代われる様な
ものではない。

「おはよう」

扉が開き、みょうがばし冥加橋博士が入って来た。白衣姿に髭と白髪というい

かにもな科学者姿。テレビから出てきたようなお約束な格好は、間違はなくわざとやっているのだ。

こんなナリをしているけれど、冥加橋博士は研究・開発部門の責任者という事になっている。総括責任者の高松司令とは分野が違っけれど、コーカサスでは同位の偉い人だ。

二人ともそんなことは微塵も感じさせないくらいフレンドリーなのだけだ。

「おはようございます、博士。博士の方は、随分と余裕があるようですね」

ぱつと見では、博士の様子に疲れたようなところは見受けられない。試運転を明日に控えていれば、普通は開発部門に余裕がある訳はないのだけれど。でも、余裕がなければ司令室に来る時間などはないはず。そうでなくても博士は研究室に籠り切りが基本なのに。

「当然じやろ。試運転ということはこっちは完成している訳だからな。データ収集の準備などは部下達ですむし、今更慌てても仕方ない。むしろこちらの具合の方が心配だな」

そうは言いつつ、昨日は博士も泊りがけだった事は知っている。

不安を与えないように余裕を装っているのだろう。

「うつつ、ごめんね、今から慌ててて……」

「いえ、博士の言うとおり、スケジュール的に現時点では司令の方が忙しいのは当然です」

司令の方にフォローを入れておく。といっても、それは事実でもあるのだけれど。

「ああ、人の情けが身に沁みるわあ……」

どうやらかなり疲れているらしい。そのまま少し休ませてあげようと思ったその矢先、司令は不意に顔を上げると、

「あー、そういえばみのりちゃん。例の彼、今年卒業でしょ？　うちに来たりしないの？」

いきなり何を言い出すのかと思えば、

「彼ではありません。それに、受かりませんよ。バカですから」

「でも、データを見る限り結構いい感じだと思うけど？　ほら、うちって体動かす仕事の方が多いから、格闘技経験者優遇よ？」

机に突っ伏したまま、顔だけ向けて手元の端末を操作する。勇人のデータとやらを開いているのだろうか。

「……どうして勇人のデータを持っているんですか？」

「うちって慢性的に人手不足でしょ？　だから見所ありそうな人材はチェックしてるのよ。ほら、彼って有段者だし、今年卒業だし。特に進路調査のコレ、うちはおあつらえ向きだと思うけど？」

「……そんなものまで持つてるんですか？」

あれは、先生に付き返された時に処分したはずなのに。

でも、頭の方はともかくとして、腕前に関しては問題ない。場数をこなしている分、即戦力としても役に立つかもしれない。

「確かにあの年になってもまだ正義の味方になりたいとか言ってる理想だけは高いですけど。……でもバカです。そこまで調べているなら30km事件もご存知だと思いますが」

「あはは、知ってる知ってる。見知らぬおばあさんの財布を持ってバイクで逃げる引ったくりを、自転車で30km追いかけて捕まえたって言う奴ね。私、そういう無茶な子って好きだわ」

「でしたらオチもご存知ですよ？　結局盗まれた財布には千円しか入ってなくて、しかもお礼をするっていうのを断って一割ということとでジューズだけご馳走になって終わり、っていう」

「そうそう、聞いた時面白すぎて死ぬかと思ったもの。素晴らしいわある意味、彼こそ私たちが求めていた人材かも」

また始まった。司令は能力も責任感もあるし、部下の使い方も知っている申し分のない上官だと思う。ただひとつ、変なものが好きだという悪癖以外は。人でも物でもノリでも何でも変なものが大好きなのだ。そして、その被害は何故か司令に気に入られている私に来る。

「だからみのりちゃん、彼に話しておいてくれないかしら。面接の点数をおまけしとくからって」

「面接の点数をおまけしたくらいでは受かりませんよ。それに、あ
あいうバカは命令無視して突っ走って、真っ先に死ぬに決まってま
すから」

「……そっか。心配なんだねえ。いいね、青春だね」

司令が怪しげな表情で笑った。何やら誤解しているらしい。

「ですから、違います」

「いいって、隠さなくて。私なんてね、学生時代は勉強漬け、就職
してからは仕事漬けで、女らしいとこなんて見せたら舐められるし、
仕舞いには鉄の女とか呼ばれてもう、青春なんてなかったんだから。
恋は出来るうちにしとくべきよ！」

聞くとところによると、司令は以前の部署ではかなり堅い性格だっ
たらしい。それが何故ここではこんなにフランクになってしまった
のか。きっと最高責任者ということで、誰にも気兼ねする必要がな
くなっただけだろう。

「……司令だつてまだまだじゃないですか」

「そうもいかないのよね。ほら、忙しくて出会う男って職場の人間
だけだし、そうすると部下か上役の爺さんしかないし。部下はや
っぱりまずいし、爺さんは勘弁してほしいしね……。みのりちゃん
がうらやましいわあ」

「ですから、彼ではないと……」

その私の言葉を遮るように。

非常ベルが鳴った。同時に警告灯が灯り、周囲が赤く染まる。そ
れまで私達のやりとりを温かい苦笑いで見守っていた所員達の表情
が、緊迫した面持ちに変わった。

1 - 2 みのり2

「みのりちゃん、現状！」

非常ベルをかき消すほどに響く声で司令が叫ぶ。それに我に返ったのか、静まりかえっていた周囲の所員が慌てて動き出した。

「はい！」

返事をする間ももどかしく、自席の機器を操作する。街内はいたるところにカメラが備えられていて、この場に居ながらにして街で起こる全てを知ることが出来るようになっていた。その中から警報を発したカメラを探し出す。

「南区に未確認物体出現、モニターに出します、準備よろしいでしょうか」

それが予測された存在であれば、軽はずみにその姿を映す訳には行かない。司令の指示を仰ぐ。

「全員、対精神攻撃防御！」

「精神防御と言われても……」

所員の誰かがつぶやく。避難訓練を真面目にやらないタイプだ、絶対。

「散々訓練でやったでしょ！ とにかく気をしっかり持つの！ ……」

…全員、いいわね？ みのりちゃん、お願い！」

「モニター出ます……出ました！」

切り替えると共に、司令室正面に備えられた大画面モニターにその姿を映し出す。

それは、巨大だった。周囲の木々と比較してみればわかる。20mか30mか。人間が認識できなくても、日常生活に問題のない程の巨大さ。それが、悠然と歩いている。

でも。

問題は、「そこ」ではない。

司令部全員の息を呑む音が響いた。一瞬遅れて、気の弱い所員の幾人かがえづく音がする。その場の誰もが動けなくなっていた。

人間の想像の域を軽く凌駕するその異形、まるでファンタスティック・リアリズムの絵画のような『ありえない』存在。そこから与えられる印象は、恐怖である以上に直接的な『絶望』。

外見は、異様に長い四肢を折り曲げるようにして歩く、四足の獣しかし、四つ這いになっている人間を思わせないこともない。

そうとしか言いようがない。形容が出来ない。人間の言葉では、人間の想像から発することの出来る言葉では、表現の仕様がな。人間の……少なくともまともな人間にはそれを認知できないほどの異様の姿が、町を歩いていた。その全身を黒い霧のようなものが……瘴気としか呼べないものが覆っていた。

二年前。『^{テミス}予言の女神』という政府組織がひとつの予測を出した。『災厄』。

そう呼ばれる敵性体が、首都圏山間の町に現れると。それは全ての人間に『絶望』を与えるのだと。

「な……何をやっているの!!」

最初に我に返ったのは司令だった。声を張り上げることと拘束を振りほどき、皆に正気を取り戻させるために机をバンバンと叩く。

その音に、所員達が動き始めた。

「いい、ここは『コーカサス』なのよ!? 人間のために神々^{ゼウス}の王に刃向かい続けたプロメテウスが、三万年の永きに渡って磔され、肝臓を抉られ続けるという絶望を耐えた、その場所なの! ここにいる全員、その覚悟は出来ているはずです。こんな『見た』だけの絶望に耐えない所員はここにはいないと信じます!」

流石司令、一瞬で全員の心を立ち直らせた。勿論、『災厄』がそこに存在する以上、完全に『絶望』を廃する訳にはいかないのだけれど。

「ふむ、精神攻撃の遮断は出来ているはずじゃが、それでもこの威力か」

「むしろ、だからこそこの程度で済んだんです。遮断対策がされていなければ、その姿を見ただけで司令部は麻痺していたでしょうから」

『災厄』のこの精神効果は、すでに『預言』されていた。そのために基地全体に対精神攻撃処置がされている。

「みのりちゃん、くわしい状況は!？」

「目標、街方角へと進行中、いずれ民家の集中する地帯へと達します」

自分の意見は挟まず事実のみを述べる。オペレーターとして教え込まれた行動。

いよいよ始まったのだという想いが体と思考を堅くする。

だが。今はしなくてはいけないことがある。その思いのみが報告を続けさせる。

「第一種警戒態勢発令! 山田さん、緊急非難勧告放送を! 関係機関には後日、私から説明をします。同時に、逃げ遅れた住民の救出班を出勤、『災厄』を直接見た人は自力では逃げられないはずだから! 対精神装備忘れないように! それと、『機体』を緊急起動させます! みのりちゃん、起動し次第補佐開始出来るよう準備、植村中尉を呼び出して搭乗するよう連絡を!」

司令の指示はすばやく、そして的確だ。ただ、

「司令、植村中尉は本日自宅待機です」

「って、あーもう、こんな時に限って! 誰よ、そんな命令出したの!」

「司令です!」

その場の全員が口をそろえて叫ぶ。逆上していた司令も一瞬止まった。が、そんな場合ではないことはここにいる全員が知っている。

「……今はそんなこといいの! 中尉の自宅ってどこだっけ!？」

「目標の反対側、ほぼ同距離です!」

「つまり、目標はここと中尉の自宅の真ん中辺りにいるってことね……ということは、到着を待って出撃するよりも途中で合流するほうが早いかな。どこか合流地点になりそうな場所、ないかしら!？」

山の迫るあの辺りには広い場所はあまりない。唯一あるものといえば。

「近くに公園があります」

私の言葉に、即座に司令が反応した。

「地図出して! ……そっか、南区ってみのりちゃん家の側だっけ。彼は大丈夫?」

今朝、公園に行くと言っていた勇人の顔が思い浮かぶ。逃げていてくれれば良いけれど、それをする性格ではないことも良く知っている。

「彼ではありません。それに、今は私事を言っている場合ではありません。地図、出ます」

モニター上の目標体に重なるようにして、周辺地図が表示される。基地と目標体位置と公園、中尉自宅にマーキングがされる。目標体の前に短い矢印が示され、その進行方向と長さで速度が分かるようになっていた。

「……そうね、目標体進行方向からずれてるし、広さも申し分ないわかったわ。『機体』を公園に移動、植村中尉と合流の後に『災厄』と交戦に入ります!」

自分のなすべきことを見つけ、行動を始めた所員たちに指示を飛ばしながら、司令は博士に聞いていた。

「博士の意見は?」

「そうじゃな。預言に間違いがなければ、あれは『殺人』アンドロクタシアーと呼ばれる個体じゃろう。他の『災厄』達よりも効果は小さいが、もっとも分かり易い『絶望』じゃ。行動が直接的な分、早く対処せねば、被害は広がるじゃろうな」

「……あの大きさを『殺人』アンドロクタシアーですか? いえ、私も聞いていました。あれなら『殺戮』ボノスでもいいのでは……?」

「いやいや、奴等の本分は直接的な行動ではない。『災厄』とはそれを呼びよせる『災厄』それ自体の名。奴が殺人を犯すからそう呼ばれるのではなく、奴が存在することにより殺人が起こるのじゃ。奴の影響を受けた者は己の殺人衝動を抑えることは出来んだろう。」

…… 奴が人気のあるところまで出た時点で、殺し合いが始まるぞ」
司令が息を呑む。軽く考えていた訳ではないのだろうが、事の重大さを改めて教えられたのだ。

「機体、及び植村中尉の状況は!？」

「出撃班、公園に到着しました! 『災厄』から約1kmの位置に前線本部を設置、続けて機体、起動準備に入っています」

「植村中尉、公園近くへ到達、まもなく出撃班と合流する予定です」
「『災厄』の進路が住宅を逸れていたのが幸いたわね。もつとも、あの辺りに民家はまばらだけど。……これならなんとかかなりそうね」
司令がふうと嘆息した。初めてでしかも予想以上に早い、準備の整っていない状態での実戦だ。それがなんとか準備が整って一息ついたのだろう。

「ところで山田さん、『災厄』の進入経路は？」

当然センサーは町の中にしか無いわけではない。周辺に設置されたセンサーは全てここからの操作が出来るようになってるし、『災厄』の可能性のあるものについては国内全域から情報が送られてくる事になっている。そのどれにもかからずにいきなり町内に現れることは、事実上不可能なはずなのだ。

「それが、いずれのセンサーにも補足されていません。いきなり出現したとしか……」

「いきなり出現って、あの質量が急に出現する訳無いでしょう?」
「いや、そうとも言えんぞ。山田君、データを出してくれたまえ」
博士に言われて山田さんがサブモニターに立体図を出した。複雑に入り組んでいて、見ただけでは何を示しているのかわからない。
「これは『災厄』が出現した直後の時空波、電磁波、重力波を表したもののじゃ。見ての通り『災厄』の出現地点を中心に乱れが」

「博士。緊急時ですので手短に」

司令が遮った。司令部一同ほっと安堵するのがわかる。

「……そうか。つまりじゃ、亜空間ポケットを使ったのじゃろうということじゃな」

「亜空間ポケットですか？」

「かなり乱暴じゃが、要するに潜水艦のようなものだと思えばわかりやすいじゃろ。潜水艦が水に潜る様に、『災厄』は空間に潜っていたのじゃな。潜ったり浮いたりする時は波を立てるが、潜っている間は波も立たんから、水上からはわからんという事じゃ」

「つまり、出現を予測するのは不可能ということですか？」

「そう言うことじゃ」

「対処療法しかないということですか」

そう、司令が安堵のため息を吐いたその瞬間だった。

「『災厄』、速度上昇及び進路変更しました！ 時速200km超えています！ 目的地、公園の模様！」

「200……！？ あの重量で！？ つ、機体は！？」

機体の管理は私の担当だ。その状態確認し、司令の叫びに答える。「起動準備まもなく終了します。しかし、植村中尉まだ到着していません」

「植村中尉、『災厄』の進路上にいます！」

私とほぼ同時に、植村中尉と交信していた山田さんが叫ぶ。

「つ……植村中尉及び出撃班を至急離脱させて！ とりあえず安全地帯へ、その後に再合流します！」

司令の指示を受けて出撃班に指示を出す。しかし。

「りようか……つ、植村中尉よりの連絡、途絶えました！」

「……！」

山田さんの報告に司令が息を呑む。でも、それで終わりではなかった。

「突撃班、撤収準備間に合いません。目標体目前」

「……つ、機体投棄を許可します！ 人命優先で！」

「しかし、司令」

機体を失う事がどういうことか、基地の全員が知っている。その全員の気持ちを代弁して私は意見しようとした。でも。

「どっちも失うよりマシでしょう!？」

もつともだった。司令部に緊迫した空気が流れるが、この場で出来ることなど何も無い。

「はい」

「完全に裏目か……どうする、機体無しで？」

「……? 『災厄』、公園内にて速度落としました。歩いている……状態です」

新しい報告に、司令部全体の雰囲気が変わる。どちらかというと戸惑いの雰囲気。

「機体に向かっているの？」

「いえ、方向がずれています。機体に向かっている様子はありませ
ん」

殺気立っていた司令室内に、ひとまず助かったという安堵が降りる。

「とは言え、今の方向転換もあるし」

でも。その中で私はモニターの中に見慣れないメッセージが流れているのを見つけた。実際に見るのは初めてだが、それが何を意味しているのかは知っていた。この状況ではありえない内容。

「司令、アジアのスタンバイ状態移行を確認しました」

「……え？」

1 - 3 アシア 1

『搭乗者確認……再起動スタンバイ……』

センサーが搭乗者を確認すると同時に、それまで休眠状態だった
人がいること
プログラム スタンバイモード
意識が半覚醒状態へと移行しました。

私はゆっくりと瞳を開けます。
モニター 表示なし

そこにいたのは見たことの無い人。各種センサーで走査。スキャン そのい
搭乗者登録の
ずれもが知らない人だと言っていました。

『搭乗者生体情報登録なし……貴方は当機の搭乗者として登録されて
いません。速やかに機体から降りてください。警告に従わない場
合、強制排除されます……』

私は警告を出しました。こういった場合のためにそう教えられて
プログラムさ
いたからです。

「あれ？ 女の子が乗ってる？」

その人は全く見当違いのことを言ってきました。

『私は当機、『プロメテウス』のサポートのためのナビゲートコン
ピュータです。性別などは存在しません。……再度警告します。搭
プロメテウス
乗登録者以外が当機に乗ることは許可されておりません。速やかに
機体から降りてください』

「でも女の子の声だろ？」

『女声なのは、搭乗者の精神的な影響を考慮した結果です。それよ
りも搭乗登録者以外が……』

「つまり、女の子の声の方が、乗ってる奴の気分が良いって事だろ
？ だったら本当に女の子だと思った方がもつと気分が良い！」

理解不能です。少なくとも、現在私にわかる語彙ではその発言の
登録された
意図を把握できません。その言葉を理解することを放棄し、最優先
事項を繰り返すことにしました。

『搭乗登録者以外が当機に乗ることは許可されておりません……速
プロメテウス
やかに機体から降りてください……』

「この状況でそんなこと言ってる場合じゃないだろ！ とりあえずあの野郎をぶん殴んなきゃ街が大変なんだよ！」

どうやら、降りてくれるつもりはないようです。あともう一度同じことを言って、それでも降りてくれない場合には強制排除するようプログラムされうに教えられていました。

でも、強制排除すると、その人は怪我をしてしまうかもしれないということも教えられて知っています。私は人間を守るために生まれました。それなのに、人間が怪我をするかもしれない行動をするというのはいいことなのでしょうか。

その時、基地からの通信が入りました。正規の搭乗者がいない場合、基地からの指令を最優先するように教えられています。ですから、私はすぐに通信を繋ぎました。

「アジア、スタンバイ状態確認したわ。何があつたの」

コトカサス

基地からの映像が流れて来ました。この人はみのりさんという方です。基地からの指示を伝えてくれる人だと記憶にあります。

データ

「みのりか？」

操縦席に乗っている人が、みのりさんの映っているモニターに向かってそう言いました。

「……勇人？」

「おう、こいつなんとかしてくれよ。この状況で乗らせないとかって強情でさ」

「まさかとは思ったけど、本当に乗ってるなんて……ごめん、ちょっと待ってて。アジア、強制排除は少し待って」

『了解』

プログラム

強制排除という行動は状況から言って明らかに人間を守るという命令よりも優先されますが、だからといって人間に怪我をさせてはいけないという判断も有効なのです。そのような事態は回避されるに越したことはありません。

すぐに画像が変わりました。映った人は高松司令でした。基地の最高責任者です。高松司令が操縦席の人に向かって言いました。

コトカサス

「話は聞いたわ。貴方が勇人君ね。私は司令官の高松です。その機体デウスとこの基地の一切を預かる……まあ責任者つて事ね。現場にいる貴方が一番良くわかっていてと思います。今街は危機的状況にあります。そして、現状を何とか出来るのが、貴方の乗ったその当機プロメテウスだけであることも、わかってもらえと思っています」

「ああ、勿論。だから乗ったんだけど」

言いながら、操縦席の人は足元のペダルを踏んだりしていました。もちろん動かないように固定されているのですが、機体の動作と関係が無い程度には動きます。そう言う余分に動く分を遊びというのだと記憶データで知っていました。

「そうね」

そう言っ、高松司令は笑いました。記憶データでは苦笑という笑い方ですが、それとは微妙に違うようです。

「率直に聞きます。……貴方は、命をかけることができますか？」

もしかしたら死ぬかもしれない……いえ、この際はつきり言います。性能のわからない敵に、操縦訓練も受けていない、それどころか兵士ですらない貴方の操縦するその機体プロメテウス。勝てる見込みは先ずありません。それでも、……死んでもこの街を守るのだと、その覚悟はありますか？」

高松司令は真剣な表情になって言いました。私には人間を守るといふ命令プログラムがされています。それが出来ない事、人間が死ぬということとは最悪の事態だということになっています。

「無い」

その人は、すぐにそう答えました。死なない、というのは私の判断グラムの中では最良の選択です。それを聞いた高松司令は少しだけ黙っていました。すぐに言いました。

「わかりました。ではすぐにその機体から降りてください。降りたからと言って安全は保障できませんが、再起動した以上、敵は敵対戦力であるその機体を狙ってくる可能性があります。そのまま搭乗しているよりは安全だと思います。それまで機体が無事だとは思え

ませんが、こちらから操縦者を送って……」

「勘違いしないでください。乗らないとは言っていないです」

そう言いながら、操縦席の人はレバーを握った腕を動かし始めました。レバーは筒状になっていいる一番奥にあつて、この筒は腕の動きを細かく走査スキャンしているのです。

「え……でも今、戦う覚悟はないと」

「違います。無いのは死ぬ気ですよ。相手の強さがわからないとか、操縦の仕方がわからないとか、そんな事は関係ないです。ここには誰もいなかったからいいようなものの、それでも公園が滅茶苦茶だから、俺はあいつをぶん殴つて、説教してやらなきゃいけないんです。その上で、生きて帰ります。そのためには、コイツが動いてくれないとどうにもならないんですが。なんとかしてくれませんか？」

司令は一瞬黙り込みました。それはあつけに取られた表情だったと思います。でも、すぐに笑顔になりました。苦笑よりもずっと明るい表情です。

「わかりました。統括責任者として依頼します。その機体……プロメテウスにて、敵性体の排除をお願いします。アジア、その人を搭乗者として正式に認定します」

司令がそう言いました。強制排除をして怪我をさせる危険は回避されたようです。二律背反から解放されて、私は負荷が軽くなりました。

『了解しました。今までの失礼をお詫びします。私の名はアジア。当機、プロメテウスのナビゲートコンピューターです。貴方を補助し、機体の制御・情報処理等を担当させていただきます。……搭乗者登録を行います。少々お待ちを』

その人が異物から搭乗者に変更されたことによって、私の対人モードが排除から補助へと切り替わりました。

搭乗席にいる人を、各種センサースキャンを使って走査していきます。網膜パターン、静脈パターン、指紋、DNAパターンなどです。

「勇人」

私が登録のための走査をしていると、画面にみのりさんが映りました。冷静な表情をしています。無表情という方が正しいかもしれません。

「……色々言いたいことはあるけど、後にするわ」

人間は、本気で怒ると表情が無くなるそうです。だとしたら、何をそんなに怒っているのでしょうか。

「これからは、私がオペレーターを勤めるわ。聞きたいことや伝えたい事があつたら、何でも言つて」

「ああ、ありがとう。……でも、みのりがこんなことしてると思わなかった、かな……」

対する搭乗者の表情は、微妙に歪んでいます。引きつっている、という状態のようです。

「オペレーターだつていうことは言つてなかったけど、ここに勤めてるって事は言つてあつたでしょう？ 別に不思議に思うことじゃないわ」

「いや、ただの公務員だと思つてたし。ってーか、ここがこんなことしてるとこだなんて全然思つてもいなかったしなあ……」

そう言っている間に登録が終了しました。

『網膜・静脈・DNAパターン・指紋登録完了。お名前をお願いします』

「神成勇人」

その名前を、記憶回路心に刻みました。プログラム教えられたことと与えられた知識以外では初めての記録になります。

『……声紋およびマスター名登録しました。オールグリーン。プロメテウス貴方をマスターとして認識しました。早速ですが、マスター。当機の縦マニュアルを説明します』

正規の搭乗者のことはマスターと呼ぶらしいのです。それに習うことにしました。

「簡単に頼む！」

『はい。では基本的なことだけ。基本的に、動作は精神感応や脳波を読み取って行う事になります。細かい補助として身体に流れる電気信号を読み取ることもあります。いずれにしても、実際の動きは必要ありません』

「……ごめん、俺バカだからよくわからない」

バカというのがどういうことかはよくわかりません。でも、マスターが理解できなかったということはわかりました。

『簡単に言えば、自分の体を動かそうとするだけで動くということです。それから、足元のペダルのつま先側を踏み込むことで足裏の車輪による高速前進、かかと側で高速後退です。本当ならば考えるだけで済みますから必要ないのですが』

「それはな、ないと寂しいからじゃ」

それまでみのりさんの映っていたモニターに、ひげのおじいさんが映りました。私とプロメテウスを作ってくれた人です。実際に顔を見るのは始めてですが。

「えと、どちら様？」

マスターが聞きました。

「わしは冥加橋博士。その機体を作った者じゃ。気軽に博士と呼んでくれてかまわん」

「はあ、博士ですか」

そう、博士です。データにある通り、見るからに博士です。白衣を着ているところとかひげなところとか。

「思いつきりペダルを踏み込んでローラーがぎゅるるん。燃えるじゃろ？」

理解不能です。どう反応すればいいのか教えられていませんでしたので、私は無視して説明を続けました。

「それ以外の細かい動作やその補正については私が担当しますので、自分の身体を動かす感覚で行動してください」

「ん、それならなんとか」

そう言いながら、マスターは腕と脚とを動かしました。急に動か

しては機体のバランスを崩して倒れたり、動かしすぎで機体に損傷を与えてしまう場合があります。そういったことを防止するのも私の仕事です。

でも、私が補正するまでも無く、機体はゆっくりと地面に手をつき、そして両足を踏みしめて立ち上がりました。

いくら考えただけで動くとは言え、自分の身体とは感覚が違うものです。急に自分の手足の長さが何倍にもなれば、立ち上がるだけでもかなり難しいでしょう。まして、実際には自分の身体ではないのです。プロメテウスにはオートバランスというものがついています。倒れないようにバランスをとる機能なのですが、それでも機体のバランスをとり、しかも立ち上がるという姿勢変化はとても難しいのです。

私は搭乗者を迎えたことはありませんが、シュミレーターでの結果が基本知識として登録されています。その中では、初めて乗った一度目で立ち上がるのできた人はいませんでした。

『……立ち、上がりました』

「当たり前だ。立たないでどうする」

『……失礼しました。ではマスター、ご指示を』

マスターの命令は簡単でした。

「決まってる！、こつちの話も聞かずに殴りかかってくるような奴の対処はただひとつ！ あのパ力をぶん殴って、おとなしくさせる」

1 - 4 アシア2

目の前すぐに、『災厄』がいます。アンドロクタシアー『殺人』と呼ばれる個体です。私は補助役であってプロメテウス本体とは別なものですから、実際には私の目の前という訳ではないのですが、プロメテウスの目は私の目の前です。やはり、感覚としては目の前というべきでしょう。

アンドロクタシアー『殺人』は、こちらを見詰めたまま動きません。戦術的に言うと、様子をみるという行動です。

「うーん、さつき見たときも凄かったけど、こうして正面から見ると、また凄いな」

「すごい、ですか？」

「おお、凄いぞ。なんか悪い夢見てがばつと起き上がったら、夢に出てたバケモンが目の前にいて、再びギャー、って感じた」

よくわかりません。でも、凄いという言葉の使い方は分かりました。

それにしても、マスターは冷静です。人類史上初めて『災厄』と交戦しようというのに。自らの命がかかっているというのに。

血圧・心拍数正常。いえ、戦闘状態ですから数値自体は高いのですが、正常の範囲内です。

対『災厄』戦用であるプロメテウスには、精神攻撃遮断処置が十全にされています。それでも、あの異様な姿を見て冷静でいられるというのは、精神構造がかなり頑健に造られているということでしょう。

『マスター、対象は『災厄』の中の『殺人』アンドロクタシアーと呼ばれる個体だと思われます』

アンドロクタシアー「『殺人』？」

『はい。あの姿を見て耐えられなかったもの、それを耐えてもあの瘴気に触れたものは、強烈な殺人衝動にかられ、殺し合いを始めるでしょう。幸い、現在までに致命的な影響を受けた人間はいないよ

うです。被害の出ないうちに倒しておくべきです」

「よくわからないけど分かった！」

マスターの体が走るといふ信号を出しました。プロメテウスがそれを感じ取り、走るといふ動作を始めました。凄いです。初めて乗って走れた人ももちろんいません。

迎え撃つ『アンドロクタシア殺人』。プロメテウスよりも先に、『アンドロクタシア殺人』の長い腕がこちらへと攻撃をしました。マスターは機体をわずかにひねって回避。その距離、約2m。機体の大きさを考えると、ほとんど紙一重です。でもマスターは言いました。

「やっぱり自分の体とは感覚が違うな、ちつとズれてる」

これだけ微妙な操作をしているのに、まだ十分ではないようです。そのマスターに、みのりさんから声がかかりました。

「勇者、相手は人間じゃないのよ？　どんな武装があるかも分からないし、想定外の動きをする可能性もあるわ。余裕の無い戦い方をしていると、対応出来なくなるわよ」

確かに、折りたたんだままでは短く見えています、『アンドロクタシア殺人』の四肢の長さは異様です。それがどのような動きを見せるのかは、今のところ分かっていません。

「ん、言われてみれば、確かにその通りだ。気を付ける！」

マスターは表情を引き締めなおすと、『アンドロクタシア殺人』に向き直りました。そこに『アンドロクタシア殺人』の攻撃。マスターはまたぎりぎりでかわしました。

「さつきから考えてたんだけどさ」

「はい」

「なんだかマスターは余裕です。」

「『さつちゃん』ってどうだろう」

「……はい？」

思わず変な声を出してしまいました。それくらい、マスターの言葉は唐突だったのです。

「いやさ、『アンドロクタシア殺人』なんてあんまりいい名前じゃないだろ？　だから、頭のさをとって『さつちゃん』」

『……はあ』

こんな時に、マスターは一体何を考えているのでしょうか。多分、こういう時に使うので間違っていないでしょう。

凄いです。

そんなことを言いながらも『殺人^{さつちやん}』の攻撃を避け続けていたマスターが、おかしい顔をしました。

「？ 今動きがぶれたぞ！ なんかしただか！？」

マスターが言いました。すぐに先ほどの動作を確認します。

『オート balanser が作動しました。操作外の動きは動作補正のためです』

「ごめん、俺バカだからよくわからない」

またこの言葉です。どうやら簡単に説明してほしいという意味らしいと記憶しました。

『オート balanser です。転倒やバランスを崩すことを避けるため、自動的にバランスを保つ機能のことです』

「ようするに、勝手に動くってことか？」

『簡単に言えばそうです』

「そんなもの使われると感覚が狂う！ 切ってくれ！」

「ゆ…… 勇人くん、流石にそれは無茶よ！？」

慌てた様子で司令が言いました。みのりさんを通さずに直接言うのは、驚いている証拠でしょう。

「司令の言う通りです。オート balanser 無しでは、立ち続けることもできないと思われますが」

「こっちは微妙な感覚で動いてるんだ！ そんなもんで勝手に動かれたら、避けられるモンも避けられない！」

無理を言います。でも、マスターの言うことは聞かなければいけないと教えられています。

「わかりました」

私はオート balanser を切りました。でも、バランスを崩して倒れるのは予想できますので、倒れる寸前に入れなおして受身くらい

は取れるように準備します。

アンドロクタシア

再び『殺人』の攻撃が来ました。マスターはそれもかわして、そのせいでバランスを崩し……ませんでした。微妙な脚の動作と手の振り、それだけでバランスを立て直していたのです。

「……どうした、アジア？」

「……いえ。失礼しました、マスター」

私はびっくりしていました。私にびっくりという感情があるとなればですが。とりあえず、これから暫定的にプログラムやデータにない操作や命令を受けた時に使うことにします。

「勇人、避けてばかりじゃ駄目よ。こちらから攻撃しないと」

その中でみのりさんが言いました。そうです。『災厄』を倒すのがプロメテウスの役目です。そのためには攻撃をしなくてはなりません。

『マスター、避けてばかりではいずれやられます。戦ってください。攻撃を』

「いいや。俺は戦わない！」

「……はい？」

「俺は戦わない。目の前に居るのは敵じゃない。俺の行く手を遮る壁だ！ だから、俺は戦わない。俺がやるのは戦いじゃない。俺がやるのは目の前にある壁をぶち壊すこと！」

理解不能です。私は起動したてであり知識はありませんが、多分この人のことはずっと理解不能でしょう。

「だとしても、その壁とやらを破らないといけない訳でしょ？」

みのりさんが言います。きっと、マスターの扱いになれているのでしょう。これからはみのりさんの言動を記録して、参考にさせて貰う事にします。

「いや、今ふと思ったんだけどさ、殴ったらコイツだって痛いだろう？」

「そついう問題じゃないでしょう？ それに、ソレが生き物かどうかだって分からないんだし」

「だとしてもさ、あっちに乗ってる奴が怪我するかもしれないじゃないか？」

確かに、『災厄』自体が生物ではなくて誰かが搭乗しているのだとしたら、この巨体で攻撃し合ったら怪我くらいはするでしょう。でも、それはマスターも同じです。このまま攻撃を行わずにいれば、いつかマスターの方が怪我をしてしまうでしょう。自分の怪我よりも相手を心配するマスターに、私はまたびっくりしました。

「……アジア、『殺人』アンドロクタシア内部走査して」

みのりさんが言いました。プロメテウスには、『災厄』の情報を
知るための機能があります。その中には生命感知機能もあるので
『分かりました……これ、は？』

「どうしたの、アジア？」

みのりさんが聞いてきましたが、私は走査結果の分析を優先しました。

再分析の結果、生命反応とは微妙に違うと結論。

「……失礼しました。『災厄』より、生命反応は検知できません。

対象は無人機、もしくは我々の概念での『生物』ではないようです」

「つまり、コイツって生きてる訳じゃないから、徹底的にやっ
いてやることか！」

アンドロクタシア

『殺人』の攻撃を避けながら、マスターが聞きました。

『肯定です』

私が答えるのと同時に、マスターは機体の体をひねった状態から

アンドロクタシア

左拳を『殺人』に叩きつけました。

アンドロクタシア

『殺人』の表面に亀裂が走ります。

でも、プロメテウスの被害の方が大きかったようです。左手の指
が全て折れて吹き飛んでしまったのですから。

「……勇人、プロメテウスは格闘戦用には出来ていないのよ。腕が
もたないわ」

「いや、指が吹っ飛んだのは驚いたけど……拳を、殴る以外のなん
に使用ってんだ！」

むしろ壊れるところがなくなって清々したという表情で、マスターは左拳を相手に叩きつけ続けます。まだ無事な右手を使わないのは最後の理性でしょうか。でも、このままでは左腕自体が壊れてしまいます。

『右腰に武装があります。それを使用してください』

私はマスターに伝えました。本当はもっと早く伝えておくべきだったのかも知れませんが、びっくりしてしまつてそれどころではなかったのです。

「ドリル？」

その武装を見て、マスターはつぶやきました。ドリルです。とがった先端、溝の掘られた表面。動力部のおさめられた胴体部分。データにもあります。間違いなくドリルです。

「そうじゃ、ドリルじゃ！ ドリルは良いぞ。抜群の破壊力、本体の出力の影響をほとんど受けない安定した攻撃力、鉛玉にはない重厚感。ドリルは男のロマンじゃ！」

博士が熱っぽく語ります。戦闘とは関係ありません。

「ドリル！ いいね！ 確かに男のロマンだ！」

マスターもそれに呼応します。『アンドロクタンダー殺人』の攻撃を避けながら。すごく器用です。

「……それはともかく、そろそろ攻撃してくれないかしら？」

みのりさんが冷たく言います。途端に二人が黙り込みました。ヘビににらまれたカエルという状態です。博士は開発部門の責任者で司令と並ぶくらい偉い人のはずですが、どうやらみのりさんの方が偉いらしいです。

「……ゴメンナサイ」

ふたりが声を合わせて謝りました。どうやらお話は終わったようです。

『ではマスター、ドリル装着します』

機体右腕の操作をマスターから一時譲り受けて、私はプロメテウスの右腕にドリルを装着しました。こういったルーチンワーク的な

動作は私にも出来ます。人間で言うと、小脳反射というものです。

一拍置いて装着したドリルが稼働をはじめます。すぐに回転数は最大まで上がり、うなりを上げ始めました。

「これだよ、これ！」

その音を聞いたマスターが叫びました。ドリルがよほど嬉しかったのでしよう。

アンドロクタシアー

『殺人』の攻撃が来ます。マスターはプロメテウスの膝を折ってしゃがみ込んで回避しました。そのまま左手で『殺人』の腕を払ってバランスを崩させて、その腹部に右手のドリルを突き上げるように突き込みました。

「ハイパー・ドリル・クラッシュヤー！」

アンドロクタシアー

マスターが何か叫びます。『殺人』の装甲は一瞬だけ抵抗しますが、ドリルの貫通力が勝りました。それはすぐに砕け散り、敵性体内部にドリルが食い込み、そのまま内部構造を破壊しました。それに伴って『殺人』内部エネルギー量が增大。

アンドロクタシアー

『マスター』、『殺人』周囲の時空波増大、亜空間転移するものと思われます。巻き込まれないように距離をとってください」

「よくわからないけどわかった！」

アンドロクタシアー

私が告げると、マスターはドリルを引き抜き、『殺人』を思い切り蹴り飛ばしました。

アンドロクタシアー

『殺人』は数m吹き飛び、その腹部に開いた穴に吸い込まれるようにして、姿を消しました。

後に残ったのは、僅かな空間の歪みのみ。しかしそれもゆっくりと小さくなっていきました。

「消えた？　なんで!？」

『おそらく証拠隠滅のため、だと思われます』

「証拠隠滅か。残った機体を分析されたりするのは困るって事か？」

『或いは、そこまでしてでも正体を隠したいのか』

「でも、消えちゃうってのはすごいな」

「ま、出現時に亜空間ポケットを使っていたしな。その能力があっ

たとしても不思議ではないじゃろう」

「……ごめん、バカだからよくわからない。でも相手が消えたってことは、これで終わったってことか？」

マスターが聞きます。私は『アンドロクタンシア殺人』がいた位置を中心にエネルギー反応を走査しました。当然のように反応無し。空間の揺らぎの残滓でしょう、僅かにエネルギー反応が残っていましたが、それも次第に小さくなっていきました。

『そのようです。お疲れ様でした、マスター』

私が答えると、それを聞いていた司令室から歓声が上がりました。大騒ぎです。

「……ところで、勇人。何、さっきの」

そんなことは気にする様子も無く、みのりさんだけは冷静です。

「技の名前だよ！　かつこいいだろ！」

「ありきたり。直接的過ぎ。ダサい。10点。優良可なら不可」

「キツッ！」

「それよりアジア、『災厄』がどうなったか、反撃の余力がないか、走査して」

取り乱すマスターを気にせずに、みのりさんが私に言いました。

『はい、すでに終了しています。敵性体エネルギー反応なし、反撃の余力は……』

その時、ほとんど見えかかっていたエネルギーの残滓が、急に拡大を始めました。

『アンドロクタンシア殺人』消滅地点の残留エネルギー反応拡大、空間の歪みが大きくなっています』

私がそう告げると同時に、それまで大騒ぎだった司令室が慌しくなりました。みなさん切り替えが早いです。さすがプロです。その中で司令が叫びました。

「ごめんなさい勇人君、もう一度臨戦態勢に！　アジア、どうなってるの！？」

プロメテウスのセンサーがわずかな反応を感じとりました。これ

は通信の電波です。

『空間固定、僅かな穴を通して通信が入っています』

「通信って、相手は人間と意思疎通の可能な精神構造な訳！？　つていうか、アジア、確か無人機だったはずよね！？」

『いえ、正確には『殺人』^{アンドロクタンダー}消失時の空間の揺らぎを利用しているだけのようです。電波微弱な上にジャミングがかけられており、発信源は不明です。もっとも、そうでなくても私の機能では空間の向こう側がどこに繋がっているかは測定しようがありません』

「そうか……わかったわ。とりあえず繋いで」

『了解しました』

司令の言葉に、私は通信を繋ぎました。サザ、と少し雑音が入った後に、ノイズで擦れた声が聞こえ始めました。

「……映像無しで失礼する。まだ、こちらの居場所を知られる訳にはいかないのでは」

モニターには何も映りません。でも、声の質からして若い女性のようにです。

「お前は、誰だ」

マスターが問いかけます。司令室の皆さんは言葉を挟まず、その通信に集中しているようでした。

「……その声はその機体のパイロットだな。通信を聞かせてもらった。名前は勇人と言ったか。見苦しいところもあったが、なかなかの戦いぶりだったと言わせてもらおう」

「あ、そりやどうも。……じゃなくて、お前は誰だっけ聞いてるんだ！」

やれやれ、というみのりさんのため息が聞こえました。色々と苦労しているのでしょう。わかる気がします。

「名乗るのが遅れたな。私は『災厄』の全てにして終着、『絶望』。貴様等の敵だと思って貰えば間違いない」

「何故こんなことをする？」

「言っただろう、私の名は『絶望』だと。全ての人間に絶望を。そ

れが私の存在理由だ」

よく、わかりません。そもそも『絶望』というものがなんなのか、私のデータにはありませんでした。

「なにが目的なんだ？」

「これは異な事を。『災厄』が災厄を撒くのに理由が必要か？ 例え、貴様等は息をするのに理由を求めるか？ 同じことだ」

「少し、いいかしら」

それまでしんと静まり返っていた司令部の中で、司令が言葉を発しました。

「……貴方が『絶望』だと言うのはわかったわ。でも、『貴方達』は何者なの？ そしてどこから来たの？」

「それに答えることを私は許されていない。いずれ知ることもある。もしも、貴様等が勝利を重ね続けることが出来るのならば。：

知らない方が良かったと思うかも知れんがな」

「……どういう、意味かしら？」

「言葉通りの意味だが？」

少しの間、沈黙が続きました。司令は言葉の意味を考えているようでした。そして『絶望』という名前の相手は、たぶん司令には興味を持っていないように感じます。

「……勇人。聞けば貴様、その機体に乗ったのは初めてだそうだな」

「ああ、それがどうした」

「今のうちによく慣れておくが良い。次には私が直接出る。つまりない戦いにはしてほしくないからな」

「お前が『災厄』とか『絶望』ってもんを持つてくるっていうなら、俺が防いでやる。絶対にだ！」

「そうか。では、楽しみにさせて貰う。また近いうちに会うことになるう。それまでせいぜい腕を磨け」

「待って！ まだ聞きたいことが……」

司令が叫びますが、それを気にする様子もなく通信は切れてしまいました。あとには雑音が響くだけです。

『……通信、切れました』

私がそう言いましたが、司令は少しの間黙ったままでした。

「……結局、何もわからないままね」

そうしてしばらく考え込んでいる様子でしたが、すぐにモニターのマスターの方に向き直りました。

「勇人くん、お疲れ様でした。基地に来てください。出来る限りのおもてなしをするわ。アジア、お願い」

『わかりました』

周りを見回して見ると、退避していた出撃班の人たちが戻って来ていました。プロメテウスでの戦闘が始まってしまうと、その気はなくても気付かないうちに踏み付けてしまったりします。だから戦闘中に近づくのは危険極まりないので、操縦者以外は近づいてはいけないのです。

プロメテウスの運搬用トレーラーも無事だったようでした。どうやら歩いて帰る必要は無いようです。今日はいろいろあったので、出来ればすぐに動作確認や最適化をしたいと思っていたので、とても助かりました。

幕間 『神託の男神（アポロン）』

「・・・では報告をお願いしようか」

「はい。本日0920、『災厄』出現。当初搭乗予定だった植村中尉は自宅待機中であり、『災厄』出現地点から、基地へ帰投してからの出撃よりも途中での合流が合理的と判断され、その旨通達されました。しかし移動途中植村中尉は『事故』により負傷。『災厄』がプロメテウスへと向かったために出撃班は退避、プロメテウスは無人のまま放置されました。そして0931。プロメテウスは搭乗者確認による起動スタンバイ状態へ移行しました」

「『彼』が乗ったためだね？」

「はい。神成勇人自宅は現場付近であり、彼の行動理念より、搭乗は予測された通りでした」

「それについては少々疑問があるのだが。・・・彼は、何故乗ったのかね？ 普通に考えれば自殺行為であるとは思えんのだが」

「彼の性質については報告書が提出されているはずです。困っている人がいれば助ける。自分に出来ることがあればやる。・・・本当のところ、こちらから働きかけるつもりでした。まさか何もしないうちから乗るとは思っていませんでした」

「・・・あれかね、彼はバカなのかね？」

「はい、その通りですが。それについても報告書に記載されているはず」

「・・・いや、わかつてはいるのだが。正直ここまでとは思わなかった。彼で、本当に大丈夫なのかね？」

「では、こちらからお聞きします。この計画に必要なのは、周囲の状況を読んで上手く立ちまわれる賢い人間ですか？ それとも、周囲に影響されずに真っ直ぐ突き進むバカですか？」

「・・・だが、彼を見る限り、その舵取りは簡単なものではないだろう。君に勤まるかね？」

「問題ありません」

「信じよう。続けてくれたまえ」

「はい。その後、神成勇人の同意により彼をプロメテウス操縦者として登録、プロメテウス再起動しました。直後『災厄』と再交戦、0946これを撃破。現在、神成勇人およびプロメテウスは基地へ向かっているところです」

「ふむ。・・・彼があれに乗ったことについて、不審に感じるものはいるかね？」

「現在のところ、いません。・・・彼の操縦技術についての疑問は皆が感じているようですが」

「それについては止むを得まい。いきなり死なれてもしたらそれこそ取り返しがつかんからな」

「はい」

「それから、最後の『絶望』の通信だが。彼女がわざわざ姿を見せたというのは、一体どういふつもりなのかね？」

「おそらく、勝利という希望に水を差すことで絶望の種を植えつけるつもりだったのだと推測します」

「それはいいが、その行為は未来予測には含まれて居ないと思ったが」

「^{モイラ}運命の女神のつむぐ糸ですら厳密に定められたものではなく、その範囲内での自由はあります。まして神ならざる我々の予測に誤差があるのは止むを得ません。それに、このことについては別段大きな事項ではないと考えます」

「ふむ、確かにその通りかもしれん。だが、だからこそ言っておく。計画の可否は君次第だ。戦闘が始まってしまえば、現場にいるものにしか誤差の修正はできないのだからな」

「はい、心得ています。・・・そろそろ、よろしいでしょうか。『

彼』を出迎えねばなりませんので」

「そうだな。詳しい報告は、後日文章にて提出してくれ。彼によるしく頼むよ。やる気を出して貰うために、出来るだけ丁寧に迎えて

やりたまえ。・・・では、今日はここまでだ」

2 - 1 高松司令 1

「ふう」

一息ついて立ち上がる。初出撃の後だから仕方が無いとは言え、雑務が多すぎる。報告なんて後でも良いと思うのだが、後回しにするにせつつかれるに決まってる。少しでも時間を見て、早めにやっておくしかない。面倒が多くて本当に疲れる。

きりがつかなくて少し遅れたけれど、出来るだけ急いでハンガーに向かった。なんとと言っても街を救った英雄を迎えるのだから。英雄、というには少し早いかもしれないけれど、ギリシア神話ではひとつ功績を立てれば英雄と呼ばれたのだ。そう呼んで悪いことはないだろう。

ハンガーについて先ず目に入っただのはプロメテウスの姿だった。派手な戦いのせいだろう、少し黒く汚れてはいたが、目立った傷は無い。

いや、左腕がひどいことになっていたが、それはやむをえないだろうと思う。それに、それを見てなおさら確認する。これが、本当に動いて『災厄』を撃破したのだと。モニターで見ていたし、今までそのために働いて来たのだとはいえ、こうして自分の目で確認してみると一層感慨深い。

とはいえ、プロメテウスばかりを見ている訳にもいかない。今は、そのプロメテウスに乗ってくれた彼を迎えるために来たのだから。ハンガー内を見渡す。すぐに人ごみが目に入った。きっと彼が所員たちに囲まれているのに違いない。そちらへと近寄って行く。私に気付いて場所を空けてくれる隊員たちに目礼をして前へと進み出した。

しかし予想に反してそこにあっただのは、隊員たちの手荒い歓迎を受ける彼の姿ではなかった。彼と向かい合うみのりちゃんの姿。やれやれ若いつていいなあ、などと思っただけれど何か様子

が違う。周りの隊員たちも、なんだか戸惑っているというかぴりぴりしてる感じがする。

「勇人、話を聞かせて欲しいんだけど」

みのりちゃんの声はやたらと冷たい。怒ってる、これは。間違いない。

「・・・はい」

大して勇人くんの声は消え入りそうに細い。まあ、このふたりならこういう力関係だろうな、とは思っていたけれど。

「どうして、プロメテウスに乗っていたの？」

その言葉でなんとなくわかった。うん、みのりちゃんが怒るのも仕方ない。

「・・・なんというか、そこにあつたからです」

ああ、それはまずい。火に油を注ぐようなものだ。

「そこにあつたら、乗るのね？　じゃあ、そこに女の子が倒れてたら乗るのね？」

「つて、みのりさん、シモはっ！」

「乗るの？」

止めようとした勇人くんの言葉に耳を貸そうともせず、みのりちゃんの視線は冷たいまま。この視線の時は冗談が通じないことは私だつていやと言うほど知っている。

「・・・乗りません」

「じゃあ、何故乗っていたの？」

「・・・なんというか、出来心で」

「ふーん？」

みのりちゃんの瞳が剣呑さを増す。ああ、これはまずい。キれる兆候だ。ある意味仕方ない気もするが、だからといって放っておく訳にも行かない。

「お迎え遅れちゃってごめんなさいねー。初出撃だったから、色々事後処理とか多くってー」

出来るだけ明るさを装って声をかける。案の定みのりちゃんは肩

透かしをくらったような表情、勇人くんはあからさまに助かったという表情をした。わかりやすい。

とりあえず、場を収めるのには成功。みのりちゃんが勢いを取り戻さないうちに話を始めた方がいいだろう。私は表情をきりりと引き締めた。

「ここを預かる者として、感謝の意を表明します。街が守られたのは、ひとえに貴方のおかげです。ありがとうございます」

勇人くんは戸惑った表情をした。それはそうだろう、一般人が敬礼をされることなどまずない。勇人君は、それでもなんとか敬礼らしきものを返してくる。

「あ、いえ、勝手に乗ってすみませんでした。それと、俺はたまたまあそこにいただけで、これ・・・プロメテウスって言うんですか？ これを作った人や、動かすために働いている人たちの方が偉いです」

おお、バカだと聞かされていたけど、氣遣いとかちゃんとできるじゃない。ちよつと感動。

「そう言って貰えると嬉しいよー。上からは締め付けられるし、守るべき国民からは何してるかわからんとか税金泥棒とかさんざん言われるしー」

司令とか呼ばれていても中間管理職なのだ。辛いのだ。世の中は世知辛いのだ。まして公務員に対する国民の目は冷たいのだ。温かい言葉なんて望むべくも無いのだ。

「でも、私たちは今日のためにいたの。戦うのも、そのための準備を整えるのも当然のことだわ。でも、貴方はそんな使命も覚悟も無いのに、しかも『災厄』と直接相対して、文字通り命がけで戦ってくれた。謙遜することはありません。今日の勝利は、貴方がいなければなかったわ」

今の私、そして多分この隊員全ての、本心からの気持ち。

「そう言って貰えると、嬉しい反面困るっていうか・・・」

勇人くんは照れくさそうな表情をした。感謝されることに慣れて

いないのかもしれない。要領とか悪そうだし。彼のデータやみのりちゃんの話からしてもそれが窺える。良かれと思ってやったことが裏目に出るとか普通にあつたのだろう。

「ところで勇人くん。貴方、これから戦ってくれるつもりはあるかしら？」

持ち上げておいて、と言うと聞こえが悪いけれど、本題を切り出す。

彼を確保できるかどうか、これからの生命線になる。どうしても断られては困るのだ。

勇人くんは少し言葉につまった。でもそれは迷っているからではなく、一瞬みのりちゃんに視線をやる。

「司令。勇人はこの人間ではありません。しかも素人です。機密維持の観点からも、戦力として見ても、優人をプロメテウスに乗らせるのは賛成できません」

みのりちゃんが私の言葉に逆らうように言った。いつも冷静で礼儀正しいみのりちゃんにふさわしくない態度で。

気持ちはわかる。しかし、他のことならともかくこれだけは譲る訳にはいかないのだ。

「先程連絡があつて、上村中尉は重傷で復帰はしばらく無理らしいの。他の候補者達はまだ実戦に耐えるレベルにはなっていないし、先程の戦闘で勇人くんの操縦者としての適性はわかったわ。今プロメテウスを動かすためには勇人くんに頼るしかないの。しかも、すでに最大の機密であるプロメテウスに乗ってしまっているし、『災厄』のことか、それ以外にも口外できないようなことも知ってしまったている。・・・このまま帰らせるとなると、記憶洗浄せざるを得ないわ」

紛う事なき脅しの言葉。今日一日の分だけだとは言え、記憶洗浄には精神的にも肉体的にも危険が伴う。進んで受けさせたい訳がない。

「・・・それは」

予想通り、みのりちゃんが言葉に詰まる。心が痛むが、仕方がない。恨まれたとしても、これだけは譲れないのだ。

「あのー、いいですか？」

置いていかれた格好になっていた勇人くんが言葉を挟んできた。

忘れてた。いや、忘れちゃいけないんだけど。

「この機体って、みんなを守るためにあるんですよね？」

「もちろんだわ。この街、ひいては世界を守るためにプロメテウスはあるの。それは、実際に乗った勇人くんが一番分かっていると思うけど」

勇人くんの視線を追ってプロメテウスを見上げる。何度見ても感慨深い。勇人くんも、同じ気持ちで見上げているはずだ。

「俺が・・・俺に、皆の平和の前に立ちふさがる壁を壊すことができるなら、」

ちら、と勇人くんの視線がみのりちゃんに向かう。みのりちゃんは堅い表情で押し黙っていた。何を考えているかは表情からは推し量れない。

「よろしくお願いします」

ぺこり、と頭を下げた。こちらから頼んでいるというのに。私は安全な司令室にいるのに、貴方だけ命をかけてくれと、無責任な事を言っているというのに。

でも。喻えどんな方法を取ったとしても、必ず勝つ。ひとりでも多くの人間を生き残らせる。それが、それだけが私に出来る唯一の戦い方なのだ。だから、

「決まりね。それでは改めて。コーカサスへ、ようこそ！」

私は殊更に陽気な声を張り上げた。危険などはないのだと、行く先には希望だけがあるのだと、そう信じさせるために。戦い続けるのだとそう答えた瞬間から、彼は協力をお願いする民間人から、勝つためには使い捨てる事も覚悟しなくてはならない道具に変わったのだから。

胸の痛みを堪えながら、私はいつものように笑って見せた。

2 - 2 植村中尉 1

植村中尉はエリートだった。一流と呼ばれる小学校に入学して以来、学年成績はほとんど一番以外は取った事がなかった。学問でも運動でも常にトップにいた。周りには取り巻きがいて、植村のご機嫌を取ろうと必死だった。

今も脇に置かれた椅子に腰掛けた男が、ご機嫌を取ろうと必死になっている。植村とは同期だが何かにつけて要領が悪く、軍学校もようやく卒業したような、植村とは確実に格の違う奴。ただ、それゆえにエリートである植村に逆らう事はなく、なんでも言うことを聞く便利な男として使っていた。

軍病院、その一等個室。それが今の植村の寝所だった。確かに、一兵卒は入ることさえできない部屋だが、これは違う。植村の望んでいたものは、こんなものではなかったはずだ。

最前線に出たのは、単に名誉が欲しかったからだ。人類初の二足歩行機動兵器に乗った人間。そして、初めて人間以外の敵と戦い、世界を・・・日本をなんてちやちなものではない。世界を救った、その名誉が欲しかったのだ。そして、その功績を持つてすれば、軍の最高司令になるくらいは当たり前に出来る。なんと言っても世界を救った英雄だ。全世界の人間に自分の名が知られる。政治の世界にだって出られる。

その、筈だったのだ。

「分かるか、アレは俺のものだ。俺が初めて乗り、初めて敵を倒し、初めての歓声を浴びる、そのための機体だった。それが、どの馬の骨とも知れない男が、それも俺よりも先に乗ったんだぞ？俺がどんな気持ちか、お前なぞにわかる筈がない！」

「あの時は仕方がなかったんだよ。中尉は怪我していたし、周囲に機体を操縦できる人間はいなかったし、いても状況的に機体に乗る込む機会はなかった。確かに悔しいだろうけどさ、怪我が治って機

体に乗れば、誰が一番なのかなんて、すぐにわかるさ」

「当たり前だ。俺より優れた人間なんていない。そんなことは誰にだってわかる。だが、俺の機体に他の奴が乗った事だけは許せない」

上田はため息をついた。こんな事は今に始まった事ではない。軍学校時代、一度だけ植村よりも上位の成績を取った男がいた。その時の植村の怒り様は只事ではなかった。文字通り、烈火のごとく怒ったのだ。その時、植村は上田にそいつを呼び出すように命令した。使い走り以上ではない上田はその場には連れていかれなかった。ただ、それからしばらくしてその男が軍学校を辞めたという事を知っただけだ。

植村は性格に問題がある。それは確かだ。しかし、それと同時に才能があることも確かなのだ。性格を理由に捨てるにはもったいない才能が。

だから上田はこの男と一緒にいる。少しでもこの男の才能を有用な方向に使えるように。だが、自分程度ではどうにもならない事も分かっていて。

病室のドアがノックされる。

「はい、どうぞ」

怒りのあまり口が利けない様子の植村に代わって、上田がドアを開けた。

「失礼します」

静かな敬礼と共に一人の女性が病室に入ってくる。植村たちと大して変わらない年齢、普通感覚であれば、植村の方が貴族があるを見るだろう。

「司令官どの。このようなところにわざわざすみません」

植村がわずかに微笑みながら言う。驚くべき変わり身の早さ。この要領のよさも植村の武器のひとつだった。いや、むしろ自分の感情よりも立場を優先させるしたたかさか。

この若い司令官については詳しい事はわからない。軍出身でない事だけは確かだが、その時点で植村が興味を失ったからだ。

そもそも、この司令の階級でこの規模の基地の責任者になるのは不自然だった。その辺りの細かい理由を知っているのは、多分博士くらいだろう。機体運営のために最適な人物、という前置きでの着任だったのだ。

「思ったよりも元気そうで、安心しました」

そう言いながら、上田に視線をやる。上田は何も言わず、ただひとつ敬礼をして部屋を出た。

「司令官どの、ご迷惑をおかけします。治療にはもうしばらくかかるようですが、出来る限り早く回復し、前線にてその分を取り返すつもりです」

「・・・その事なら、心配には及びません。貴方の後任が決まりました。貴方は気にせず、怪我を治す事を第一に考えてください」

植村は、一瞬何を言われたか分からないという表情をしていた。その表情に理解の色が浮かぶまで、司令はそれをただ黙って見ていた。

「・・・それは、操縦者としての任務から外れるという事でしょうか」

「現時点では、そういう事です。貴方の回復までに『災厄』の襲撃が無いとは限りません。いえ、むしろ無いと考える方が不自然です。戦略上、何時までも操縦者代理に任せるという訳にもいきません。貴方の処遇については、回復を待って決定する事とします。・・・大丈夫です。現在我が基地は常に人材が不足しています。貴方のような有能な人材を無下に扱うという事はありませんから。ですから、治療に専念し、早い戦線復帰を期待します」

返事をしない・・・出来ない様子を確認し、司令は席を立った。身動きしない植村に敬礼をし、そのまま退出する。

しばらく、植村は無言だった。戻ってきた上田が雰囲気吞まれて恐る恐る椅子に座っても、ただ黙っていた。

「・・・上田」

その声を聞いたとき、上田は背筋の凍る思いをした。怒りを堪え

ている声。つねに感情をむき出しにしてきた中尉がこんな声を出す事があるとは思っていなかった。

「機体に乗ったって奴の資料を集めてくれ。急げ」

その目に見据えられた上田は、硬直していた。急げと言われ、そうしなければ確実に怒りが自分に向けられると分かっているが、体が動かなかったのだ。

「・・・急げと、言っただけだ」

はじけるように、上田は走り出した。取り返しの付かない状況になりつつあるのは分かっていたが、今回もまた自分の力ではどうにもならない事を感じながら。

2 - 3 高松司令 2

「とゆう訳で、これから会議を始めますので皆さんいつもの会議室へ移動してください」

私の言葉に、司令室は一同大歓声。例外は何の事が分かっていない勇人くんと、苦い表情のみのりちゃんだけ。

「司令、『いつもの』というと・・・あそこですか？」

「あのね、みのりちゃん、」

何か言おうとしたみのりちゃんの機先を制する。理屈で勝てないのはわかってるのだ。ここは勢いで押すしかない。

「いよいよ『災厄』が出現した事で、私達には重い責任が課せられたわ。それを果たすにはありとあらゆる対策をとり、いかなる事態にも備えなくてはならない。そのためには私達にはあまりに時間が足りないわ。従って節約できる時間は可能な限り節約しなくてはならない。当然食事をする時間すら節約対象にしなくてはならないわ。そうでしょう？」

「は、まあそうですねがそれとこれとは」

「という訳だから、一秒も無駄には出来ないわ。さ、急ぎましょう！」

まだ何か言おうとしているみのりちゃんを有無を言わずに引きずって歩く。私だってやられっぱなしではないのだ。

司令室勤務の全員を引き連れてやって来たのは所員食堂。入ってすぐに調理場に声をかける。

「やほ、おミネー。奥のテーブル借りるよー」

「おう、注文さえしてくれば客だからな。ごゆっくりー」

食堂の主、美音子とは高校時代からの馴染みなのだ。独立したがつているのを聞いてここに推薦したのだが、今では大成功だったと思っている。職務上全員が一度に昼休みになる訳ではないとはいえ、百人近いこの大所帯の胃袋を満足させている上に、多くの所員から

おふくろさんと慕われているのだ。私と同年だけど。

「もう、美音子さん、啞え煙草は止めてくださいとあれほど言っているのに」

美音子に食って掛かっているのはいつも通りにみのりちゃん。

「はっはっはっ、あたしは煙草がないと料理が出来ないのだ。止めたらみんな飢えて仕事にならんぞ？」

「また適当な事を言って。煙草は味覚を鈍くしますよ？ 料理人としての誇りはないんですか」

「煙草くらいで参るようなやわな味覚はしてないよ。それに、ここじゃ私が法だー」

食堂で美音子に逆らうくらい無謀な事はない事はみのりちゃんも知っている。量を減らされるくらいの嫌がらせならともかく、出入り禁止にでもされたら命に関わる。

「・・・料理に灰を落としたりしないでくださいね。ここが閉鎖になったら私だって困るんですから」

「そーゆーのを釈迦に説法っつーの。料理人暦と喫煙暦があたしを上回ってから言いなー」

もっとも、二人のコレは、言い争いと言うよりは挨拶代わりだ。ほぼ毎回繰り返されるやり取りで、むしろ二人とも楽しんでいるように見える。

「あ、そーだ、ミネ。紹介しとくね。こっちが神成勇人くん」

「おお、君がそうか。活躍聞かしてもらったよ。近頃の若いのにしちゃたいした根性だ」

ミネは勇人くんの手を無理矢理取ってぶんぶん振り回した。ちよつと驚く。ミネにとって、自分の方から相手に触れるというのは、最大限の敬意なのだ。

「なんだ、もう聞いてたの？」

あれからまだ一時間も経ってはいない。あの戦闘の事が知られているのはむしろ当然だが、操縦者の事が伝わっているのはいかにも早い。

「当然でしょーが。情報収集は酒場ですんのが基本だよ。ここにや酒はないけどさー」

にやははと笑う。なるほど、ここに集う所員達がニユースソースか。分かる気がする。ミネは所員達から慕われているのだ。主に盛り付けを鼻屑して欲しいとかの理由で。いや、もちろんそれだけではないのだが。

「よし、じゃあ始めてのお客さんでもある訳だし、お礼の意味もかねてニイさんにはあたしのおごりだ」

やったー、と関係の無いところから歓声が上がる。

「あほう、おごりはこっちのニイさんだけだよ！ お前等は自分のお足で払いな」

ええー、と声上がるが、こちら本本当に奢ってもらえる等と思っている者は少ししかない。これも所謂お約束なのだ。

「じゃま、そろそろ席に着きましょうか」

この大人数で調理場の前を占拠していたのでは他の皆の迷惑になる。司令である私が率先して迷惑行為ではみんなに示しが付かないみんなを引き連れてテーブルに着いたところで、みのりちゃんが立ち上がった。

「では、注文は？」

所員食堂であるここは、食券制になっている。当然注文から膳の上げ下げまでセルフサービスだ。そこにこの大人数で来ればそれなりに手間がかかるものだが、そういう時こそみのりちゃんが率先して動いてくれる。来る前はなんだかんだ言ってもやるべき事はちゃんとやる。そういうところ重宝するし、可愛くて手放せないのだ。

「俺チャーハン」「カツ丼」「んー、オムライス」「ミートソースにするかな」「ハンバーグ定食」「しょうが焼き大盛りで」「財布の具合からいってコロッケ定食か・・・」「親子丼ね」「俺天ぷらそばにしよう」「ナポリタンがいいな」「私、きつねうどん」

見事にバラバラだ。もしかして、ウチってまとまり悪いのだろうか。司令としてちょっと考えてしまふ。とか言いつつ、

「ヒレカツ定食」

子は親に似ると言うけれど、部下は上司に似るのだろうか。それじゃあ仕方が無いねえ。

「と、それから餃子を4つに焼きソバ2つ。これは私のおごりよ。みんなでつついてね」

『ひやつほう、司令太っ腹！』と上がる歓声に『太ってない！』

とお約束で返す。みんなじゃないにしろ、これを楽しみにしていたのだろうか。まあ、喜んでもらえるに越したことはないんだけど。

「司令、ご馳走様です。では、注文繰り返します。チャーハン、カツ丼、オムライス、ミートソース、ハンバーグ定食、しょうが焼きの大盛り、コロツケ定食、親子丼、天ぷらそば、ナポリタン、きつねうどん、ヒレカツ定食、以上が各1、それに餃子4、焼きソバ2」
メモを取っている訳でも無いのに正確に答えるみのりちゃんに向けて、感心した声と共にぱちぱちと拍手が上がる。いつもながらみのりちゃんの暗記力はたいしたものだ。

「・・・で、勇人は？」

そういえば勇人くんはまだ注文をしていなかった。なんとなく全員の視線が勇人くんに集まる。

「えーと・・・」

悩んでいる、というか困ってる？ プロメテウスの操縦席にいたときの印象からすると、こういう時に悩んだりするタイプには見えなかったのに。

「・・・オススメとかありますか？」

「ミネー、オススメかなんかあるー？」

厨房に向かって大声を出す。このくらいの事には慣れっこなので、まわりの所員たちは別段気にする様子も無い。

「そーだな、今日はカレーがいい具合に仕上がってるぞ」

「うん、カレーいいね！ じゃあカレーライスで」

「ん。じゃあ、代金は後で回収して回るから」

そう言ってみるのりちゃんは券売機の方へと歩いていった。うん、

よく出来た娘だ。勇人くんにはもったいないかも。

「・・・どうかしました？」

「え？　いいえ、別になんでもないのよ？」

ほほほ、と笑って誤魔化す。危ない危ない。

「では司令、始めてください」

いつの間にか戻って来ていたみのりちゃんが言う。いつの間に？

「そ、そうね。では早速始めましょう。先ずは今回の戦闘の反省点からね。まずは、私の判断の甘さが皆さん・・・特に勇人くんに迷惑をかけた事を謝っておきます」

「そ、そんな司令、あの状況では、あれが当然の判断でした」

「そうです、基地からの発進にするにしても、別の場所での合流にしても、街に被害が出る前に出動は無理だったでしょう。あの時はあれが最良の判断だったと今でも思います」

「うう、ありがとうみんな。こんなにやさしいひと達に囲まれて、私はしあわせだわ」

「・・・司令、続きを」

ノリノリのみんなに、みのりちゃんが冷静に突っ込む。

「そうね、泣いてちゃみんなに笑われちゃうわ」

悪乗りを続ける私を呆れ顔でみのりちゃんが見詰めてた。うん、そういう反応も可愛いわ。

「では、何故『災厄』がそのような反応を見せたのか、何か気が付いた人はいるかしら？」

「それについてですが・・・」

みのりちゃんが喋り始めようとするのを遮って、

「はい、発言は手をあげてからにしてください！」

「・・・司令」

みのりちゃんが『やれやれ』と言う顔をしながらも手を上げる。

うん、付き合い良いところも良い感じた。

「はい、みのりちゃん」

「プロメテウスの起動状況を見ていて気付いたのですが。敵性体は

プロメテウスの起動プロセスにおけるエネルギー量を感知して行動を起こしていた可能性があります」

「どういうことかしら？」

「はい、詳しい資料は後でまとめますが、敵性体が針路変更をした時点では、プロメテウスは移動用トレーラーの電源を利用して起動動作を行っていました。そのエネルギー量が感知量を上回った時点で敵だと認識したのではないかと。そして突撃班が撤退して起動動作が中断し、エネルギー量が感知量を下回った時点で敵であるという認識を失い、それまでの行動を中断した・・・その可能性があると思います」

「でも、プロメテウスは実際に起動して待機状態にあったわけだし、その後再起動した時にはいきなりおそいかかつてはこなかったわけよね？」

「現場近くには工場があり、その電力量はプロメテウス待機状態よりも多量のエネルギー量に達していますが、敵性体の攻撃対象にはなっていないません。また、動作を始めたプロメテウスへの行動の差は、動かない相手に対しては動作を始める前の早急な排除を、動作を始めた相手へは戦闘を念頭に置いた慎重な対処を、というプログラムをされていたと考えればつじつまは合います。もちろん、可能性以上のものではありませんが」

「そうね、断定は危険だけれど、今はそれ以外に納得の行く理由付けはないわね。誰か、それについての意見はあるかしら？」

「しーん、と静かになる。誰も何も思いつかないらしい。全員初めての経験だし、何か気付く程の余裕はなかったというのは当然だけれど。」

「では、その方向で検討する事にします。・・・でもそうすると、どこかに隠れて待機モードにしておけば、相手が通り過ぎた後に奇襲とかって方法もある訳よね」

「それが有効である可能性もありますが、次に来るのは有人機だという事ですから、それは難しいのではないかと」

「ううー、人生って上手くいかないね」

「しかし、次に無人機が来た時には使えるかも知れません。．．．もっとも、失敗した時には待機モードで『災厄』の攻撃を受ける訳で、致命的な被害を受けかねませんが」

確かに、みのりちゃんの言う事ももっともだ。危険の方が大きい。何か有効な対策は、と考えて、夢中でカレーを食べてまくっている勇人くん視線を向ける。

「じゃ、実際に戦った勇人くん、何か感じた事とかあるかしら？」

「．．．はい？」

他人の話を聞いてないよ、この子。

「だからね、何か感じた事があつたら教えて欲しいんだけど」

「このカレー、最高です！」

本気だ。本気で言っている。

「えつとね、そうじゃなくて、『災厄』と戦ったのは勇人くんな訳でしょ？ だから、それで何か感じた事はなかったのかなー、というのを聞きたいのだけど」

「立ちはだかる壁はぶち壊す！ それで万事解決です！」

呆然とみのりちゃんの方を見る。みのりちゃんはただ黙って首を横に振った。

駄目だ。この子は。本格的に駄目だ。

「えーとね？ 私達はあの『災厄』に対抗するために、対策を考えたり相手の正体はなんなのかなー、とか考えたりしないといけない訳ね。だから、実際に相対した勇人くんの意見を聞かせて欲しいんだけど」

「．．．ああ、そういえば！」

唐突に勇人くんが手を打った。何か思い出したらしい。それがどんな些細な事でも打開策に繋がる可能性がある。私は身を乗り出した。

「うん、何！？」

「あれって一体なんだったんですか！？ 悪い奴だって事だけはわ

かつたんですけど」

その姿勢のまま顔面からテーブルにダイブ。最近では素人漫才でもやらないような見事なコケ。

「・・・司令」

「言わないで。わかってるから」

助け起こそうとするみのりちゃんの手を断りながら自力で立ち上がる。

「・・・そうね、勧誘があつさり行き過ぎて、何がどうなってるのかの説明とかするの忘れてたわ。他のみんなは分かっている事だとは思うけど、初心に帰る気持ちで現状の再認識として聞いて頂戴」
言いながら脇に置いてあつたホワイトボードを引き寄せる。司令部の会議は大概ここで行うのでこういうものは常備しているのだ。

「先ず、こことは別系統になります。未来予測室、別名『^テ預言の女神』という機関があります。文字通り、これから何が起るのかという予測をするところね」

ホワイトボードに大きく『^テ預言の女神』と書き込む。

「あの・・・司令」

「はい、通信士の山田さん」

「『^テ預言の女神』という名前はよく聞くのですが、具体的にどんなところかということは全く分らないんですが・・・」

「そうね。『^テ預言の女神』については極秘扱いだからね。内閣調査室所属だとか言う噂もあるし。私も前線の司令官に過ぎない訳だし、大したことは知らないのよ。予測の方法についても呪術的な方法に拠っているとか、公表されていない最新鋭のスーパーコンピューターを何百台も使つてるとか、定かではないし。ただ、漏れ聞いた噂から推測すると・・・」

ホワイトボードに新しく『30%』と書き込む。

「『^テ預言の女神』の的中率は30%程。決して高くは無いけれど、無視出来る数字でも無いわ。地震予知は現在10秒前が限界らしいけど、その10秒が生死を分けることになるという話はみんな聞いた

たことあるよね？　それが一、二年前に分かれれば被害は相当量減らせるわ。やり方次第では、犠牲者ゼロだってありえる。少しくらい確率が低くても、何千、何万という犠牲を抑えられる可能性があるなら、それを実践しない理由は無いわ。そう言う訳で、『^{デミ}預言の女神^ス』の予測は眉唾扱いはされても、それなりに重要視されている訳よ。そして、その『^{デミ}預言の女神^ス』が、二年前にひとつの予測を出したの」

ホワイトボードに向かい、文字を書き込む。『災厄』。

「正体不明、『災厄』という名の敵性体の襲来。場所とおおよその時期付きで。ま、時期については大分早まっちゃったみたいだけど。あと一月は余裕ある筈だったのになー」

おかげで今、基地内も上層部也大騒ぎ。本当なら、起動実験と完熟訓練が終わってから実戦の予定だったのに。

「でも司令、そう言う場合自衛軍とか持つてくるんじゃないんですか？　今あるものを使った方が楽で確実だと思いますけど」

「そうでもないのよ。軍を移転させるのって凄く大変なの。ただでさえ軍縮が叫ばれてる上に、地元住人は間違いなく反対するし、新しい基地を作るとなると莫大なお金がかかる。しかも、さっきも言った通り未来予測は確実とは言えないの。それだけ大騒ぎして外れました、なんて事になったら目も当てられないもの。それに引き換え研究所という名目なら反対もされ難いし、なによりここで研究したことは無駄にはならないわ。それに、なんと言っても・・・」

ホワイトボードに新しい文字を書き付ける。

『絶望』

「先の戦闘で分かったと思うけど、『災厄』の周囲には瘴気と呼ばれる物質が満ちている。これは見ただけで影響を受ける事からも分かるように、BC兵器ではないわ。いわゆる精神攻撃よ。軍の装備では対抗できず、更に言うなら対応する人数が増えるほど『絶望』に絶えられない人間が出る可能性が高くなる。例えば・・・今回軍が出撃して、『殺人』の影響を誰か一人でも受けたらどうなったか

しら？ 味方に後ろから撃たれる事になっていたはずだわ。そうなればもう何とか耐えていた人間も影響に捕らわれて、交戦する以前に壊滅よ。故に、軍による対処という選択肢は無し。ま、こっちの研究結果を軍備に取り入れようっていう考えはあるようだけど、現時点では個人単位で利用できる精神防御を人数分作る時間もお金も無い訳よ」

分かったかな？ という視線を勇人くんに送る。彼のために説明してるのだ。わかってもらえないと意味がない。

「はあ。いろいろ難しいんですね」

呑気だ。いや、これが彼の精一杯なんだろう。みのりちゃんの視線でわかった。

「でも要するにここは最前線基地な訳ですよ。その責任者なんて、司令つてすごいんですね」

おお、すごい。勇人くんが他人の話を聞いている。

「いやいやそれがさ、『災厄』が本来に来るなんて与太話、誰も信じてなかったの。実戦がないとなると、この実質的な責任者は博士になる訳で、司令なんていつでも単なる雑用係に過ぎないわ。そんな出世に関係なさそうな閑職したいなんて人はいなかったのね。それで私にお鉢が回ってきた訳。実際の階級よりもランクの高い役職だったからお給料も良いし、敵が来ないならその分暇でしょ？ 二つ返事で引き受けたんだけど・・・いや、まさか本当に『災厄』なんてモノが来るなんてねー」

あははと笑った。いやあははじゃないだろ、と周りから視線が飛んでくるが無視。

所詮、ここでの私に口出できるモノはいないのだ。実戦が開始された現在では特に。この愚民どもめ。

冗談はさておき。

「そんな訳で、現在基地内は常に臨戦態勢にあります。それでなんだけど、司令部の全員と操縦者である勇人くんには、出来るだけ基地内で待機していて欲しいの。居住区に部屋を用意してあるから、

そこを使つて貰うつて事で。強制ではないけれど、前回の失敗もあるし出来るだけ協力して欲しいの。それから基地を離れる時は事前に行き先の報告と連絡手段の確保を忘れないように。期限はいつまでになるかわからないけれど、少なくとも幾らかでも余裕が出来るまでは協力をお願いすることになると思います。それについて意見は？」

幾人かが嫌そうな表情をしたが、流石に現状を理解しているのだろう。反論するものはいなかった。

「ありがとうございます」

素直に頭を下げる。今に限った事ではない、司令部のみんなには、いやこの基地のみんなには感謝をしてもしたりない。

「でも、そういうのって楽しそうだよな」

現状をわかつてない風に勇人くんが言う。ま、あんまり深刻になられても余裕が無くなつてしまつて良くないのだけれど。

「それにしてもねえ・・・」

と水を飲んで話を続けようとした時、

「し、司令！」

叫ぶ声にそちらを向く。指差す付けっぱなしのテレビの方に視線を向けてみると、

「これは特撮ではありません！ つい先ほど、実際に起こった映像です！」

ぶつ、と噴き出す。映っているのは間違いなく『災厄』、それとプロメテウス。あろう事が実際に格闘している場面すら映し出されている。

「げほっ、げほげへっ」

気管に水が入って咳き込む私の背中をみのりちゃんが擦ってくれる。自分でも胸を叩いてようやく落ち着いていた。

「あ、すごい。あれに俺乗ってるんだなあ」

状況が分かつてない様子の勇人君、呑気すぎる。

「げほっ・・・み、みんなおち、落ち着いて・・・」

「・・・司令」

脇からみのりちゃんが鼻の辺りを拭ってくれる。ヤバイ、鼻水が。
「あ・・・ありがと。・・・って、テレビポリウム上げて！」

叫ぶと、テレビの近くにいた隊員が反射的に立ち上がり、ポリウムを上げた。

「これは、付近の住民がホームビデオで撮影した映像です」

「そんな訳あるかあ！」

思わず叫ぶ。『災厄』を目前にして、その瘴気の只中で呑気にビデオを回せる人間は存在しない。明らかに精神防御された場所、恐らく特殊車両内での撮影だ。しかも画像に手が加えられて『絶望』の影響の減免措置まで取られている。『災厄』を知っている者の行動だとは思えない。

でも、減免措置とは言っても、精神攻撃を完全に押さえられる訳じゃない。

『誰かを殺したいほど憎んでいた』人間が、それを実行に移してしまうくらいの影響は出るはずだ。

「・・・政府の公式発表によると、」

「公式!？」

まだ一時間くらいしか経って無いのに!? というか、報道機関も無いようなこの田舎で起こった事が、この短時間でニュースになつてるって事自体びっくりなのに。

・・・という事は。

「・・・こちらの存在は正体不明で、『災厄』と呼ばれているとの事です。そして一方、こちらのロボット・・・これは付近の研究機関『コーカサス』の開発したロボット、『プロメテウス』というものだとの事です」

「って、もうウチの名前が出てる!？」

慌ててテレビに駆け寄る。かぶりつきで、掴みかからんばかりに肉薄して。

「おーい、テレビ壊すなよー」

ミネの声なんか聞こえない。

「繰り返します。これは特撮ではありません。つい先ほど、本当に起こった出来事です」

「・・・司令」

周囲から不安げな声。

そう、こういう時こそ司令官が落ち着かなくてはいけない。

「大丈夫！ みんな落ち着いて！ いずれメディアに載ってしまう事は止むを得ない事でした。・・・思ったよりもずっと早いけど！ いずれ周知の事になるのは、むしろ当然だったの。・・・映像まで付いてると思わなかったけど！」

お前が落ち着けよ、という視線は無視。

「いいですか、以前からこういう場合の対処はみんなに伝達してあったはずです。すべて広報の公式発表にまかせ、実際に取材等あった場合は「わかりません」で通してください！ 特に、操縦者については極秘です！ 手続きが済むまでは民間人なのですから、名前や個人データの漏洩には厳重に注意を！ みんな、いい？ 全て予想の範囲内です、大体は！ だから、不安に思う必要はありません。いいですか！？」

反論できないように一気に捲し立て、それから周囲を見回す。ぽかーんとした視線の中、ひとりみのりちゃんだけが立ち上がる。

「いえ・・・どちらかと言うと、司令の特異な行動が不安なんですよ」

おおっと。

「とっ・・・とにかく、上の意向を確認してきます！ みのりちゃん、後は任せました！」

「え・・・私ですか？ 私よりも、秘書官の河本さんや通信士としても先輩の山田さんの方が適任だと思いますが」

「勇人くんの相手には、貴方以上の適任はいません！」

一同納得したところで、慌てて走り出す。

全く、なんて無茶をするんだ、ヤツラは！

「ああつ、その餃子はわしが最後に食べようと取っておいた・・・」

「いくら博士が相手でも、これだけは早いもの勝ちですよ」

「うつつ・・・じじいは耐えるしかないのかのう・・・」

後ろではなにやら呑気な事を言っているが無視。

「それじゃ、最後に重要点をまとめます」

重い足取りで食堂に戻ってくると、みのりちゃんが話をしているところだった。話の腰を折るのもなんだし、こっちは話にくい内容なのでみのりちゃんの話が終わるのを待つ事にする。入り口付近の椅子に腰を降ろして、みのりちゃんの話を聞く。

「ギリシアでは、先住のティターン神族と新進のオリンポス神族の間で戦いがありました。戦いの結果、オリンポス側が勝利、世界はオリンポスの王、ゼウスが支配することになったわけです。一方、ティターン神族だけれどオリンポス側についていたプロメテウスはゼウスに重用されることとなり、その後人間を創りました。でも、人間は他の動物に比べて種族として弱かった。そこでプロメテウスは人間に『火』を与えたいと考えたの。『火』は生活にも産業にも必ず必要な、いわば知恵や文化の象徴。でも、人間を神々に取って代わる存在だと恐れ、何度も滅ぼしたり力を奪おうとしていたゼウスがそれを許す筈がなかった。そこでプロメテウスは『火』を盗み出し、人間に与えたの。それまでも自分に刃向かって人間を守り続けていたプロメテウスにゼウスは怒り、その罰としてプロメテウスは山頂の岸壁に磔にされました。しかも、毎日再生する内蔵を鷲に永遠に抉られ続けるという責苦を伴って。その絶望的状况でも、プロメテウスは洪水を予言したり、イオに天啓を与えるなど、人間の味方であり続けました。この基地のコーカサスというのはそのプロメテウスが磔になった山の名前。ここはプロメテウスと共にあらゆる痛みに耐え、戦い続けるための場所。・・・もつとも、そこまで深く考えている人ばかりじゃないけれど、おおよそそんな感じです。すね、司令？」

気付いていたらしい。やはりそつが無い。

「ありがとう、みのりちゃん。そうね。覚悟とか含めてそれで間違いないわ」

立ち上がり、正面に向かって歩く。みのりちゃんがさりげなく動いて場所を譲ってくれる。

「でも・・・そんな覚悟とは関係ない人とかいるのよ、これが」

ため息を吐く。現場ではこんなに一生懸命なのに、後ろの方では全く。

「えーとお、マスコミ公開における公式見解を発表しますー」

頭をぼりぼりと掻きながら、手にしたファイルに目をやる。興奮を抑えるために、無理にやる気のない風を装いながら。

「現状を正確に知って貰う事によって国民の皆様のご理解とご協力を得るためー。いじょーだそーです。簡単に言うと、予算・・・つまり金とー、あと票とりのためってことでー」

と、ここまできて興奮が最高潮。パンツ、と手にしたバインダーを床に思い切り投げつけた。

「ったくこの政治屋どもが！ 現状を正確に理解してないのはあんな達だつての！」

興奮のあまり、しばらくはあはあと肩で息をする。

あーやつちつた、と思っただけで、やつちやつた事は仕方ない。それにあんまりみつともないとも見せられないし、何事もなかったかのように投げ捨てたばかりのバインダーを拾い上げ、ほこりを手で払った。

「えー、でもって取材とかにも協力しろとか言われてますがー、今までどおり『広報に聞け』で通してください。責任は私が持ちますー。ではいじょーかいさーん」

出来るだけやる気のなさそうな声で言い置いてその場を後にする。あーまずつた。司令たる者、いかなる時も興奮しちやいかんよ。でも仕方ないじゃん？ 『災厄』を防ぐために現場がどれだけ苦労してるかも知らず、自分たちの利権と保身のためだけに、現場へ

の影響を考えずに『見せる』という行為に及んだ上層部に対して怒るのは代表者として当然だし。

でもまずったなあ、部下達にあんな態度を見せたのは。反省。

2 - 4 アシア 1

モニターにニュース画面が映っています。その中では、アナウンサーの人が隣に座った学者さんに聞いていました。

「……ではお聞きしますが、あのロボットの名前である『プロメテウス』とは、どのような意味なのでしょうか？」

あれから何日かが過ぎて、プロメテウスと災厄の姿を映すだけのニュースは減ってきました。今ではこういうもう一歩進んだ話題が多いです。

でもマスターはそれを聞くでもなく、ただぼーっとしていました。マスターは最近、こうして操縦席にいる事が多いです。

「ギリシア神話によると、プロメテウスは人間を作った神であると言います。そのせいもあるのでしょうが大変な人間彙員でした。そのため、神の王であるゼウスが天から持ち出すことを禁じていた火を人間に与えてしまったのです。その結果、プロメテウスはコーカサスという山の上に磔になるという罰を与えられました。基地の名前のコーカサスとは、この山の名称から来ているでしょう。一方、火とはそれがなければ道具を創ることも出来ないものですから、文明・文化の象徴と言えます」

「つまり、プロメテウスとは人間にとって文明や文化をもたらした恩人であると言う訳ですね？」

「そうとも言い切れないのです。ゼウスは火を手に入れた人間に対して、パンドラという女に箱を持たせて使わしたのです。開けてはいけないと言われていたのですが、神から好奇心を与えられていたパンドラがその箱を開けると、中からは様々な災厄が現れました。最後に希望だけが残っていたという、有名なパンドラの箱の話です。それによると、箱から現れた災厄の中には飢餓や貧困といったものも含まれていて、それまでは自然に生っているものだけで十分生きていけたのに、それ以来働かないと生きていけなくなってしまうた

という事です。当然、昔は科学技術もなく、文明は自然に対する武器としては不十分なものでした。故に、ギリシア哲学ではほとんどの場合、プロメテウスは罪人として扱われていました。……ところで、無知だった人間に知恵を与えて樂園から追い出した存在がキリスト教にも存在するのですが、ご存知ですか？」

「えっと……エデンの園の蛇ですか？」

「はい、その通りです。創世記で、イブに知恵の実を食べさせた蛇です。キリスト教ではこの蛇はサタンとかルシフェルと呼ばれる悪魔だと言われています。つまり、プロメテウスのした事は悪魔の所業と同じ事だという訳ですね」

「先生はどうお考えですか？ プロメテウスが火をもたらしたのは良い事だったのでしょうか、それとも悪い事だったのでしょうか？」

「今の人間社会が良い方向に向かっているとは言えないと思います。ですが、そうやって考える事が出来るのも、人間に知恵や文明があるおかげだと言えます。それがなければ人間は滅びていたか、今とは全く違っていたと言う事だけは確かですね」

「この巨大ロボット、人間にとって善いものなのか、それとも悪となるのか。目を離す事は出来ないようです。いったんCMです」

好き勝手を言います。プロメテウスもマスターも、人間達を守るために戦っているというのに。

今のニュースをどう思っているのかとマスターの様子を窺いました。でも、マスターはニュースなんか全然聞いていないようでした。少しだけ安心しました。あまり、マスターに聞かせたいような内容ではなかったからです。

「……パンドラの箱」

いきなりマスターがつぶやきました。

「な、何ですか？」

びっくりしました。聞いていないと思っていたのに、どうやら聞いていたようです。

「なんか、パンドラの箱とか言ってたかったか？」

『……えーと、私は言いませんでしたけど?』

説明してマスターに嫌な思いをさせたくありません。私はとぼける事にしました。

……嘘は言っていませんよ?

「そっか。なんか、聞き覚えのある言葉な気がしたんだけど。どこで聞いたんだっけかな」

マスターの表情がなんだか複雑そうです。あまり良い思い出ではないようです。だから、私は話を変えることにしました。

『ところでマスター。皆さんは会議中だと思うのですが、マスターは参加しなくてもよろしいのですか?』

少し前に放送がありました。プロメテウスの初出勤から幾日かが経っていますが、あれ以来、基地内……特に司令部と整備班の慌しさは凄いです。整備班はプロメテウスの修理と戦闘データを元にした改造計画の立案で一杯一杯、司令部では効率的な作戦計画や報道への対処で大変な事になっています。基地内は、もうどこも監視用モニターで確認するまでもない大混乱です。

「なんか知らないけど、俺はいいんだって。操縦の練習でもしてるって言われた」

きつと、マスターに会議内容など聞かせてしまえば、インタビューとかされた時に質問されるがままに答えてしまふという判断でしょう。

極めて正しいです。

「でもさ、これってすごいよな。考えただけで自分の身体みたいに動くしさ」

『はい。もともと博士の専門は精神工学ですから』

「えっと……何?」

『精神工学です。人間の精神を機械にフィードバックさせたり、再現させる研究です。例えば私に使われている、機械が人間と同じように思考する能力もその一環なのですよ』

「へー」

やはりマスターはわかっていないようです。

『でも、操縦の練習でしたら、シミュレーターを使っただけでいいですか？ その方が役に立つと思うのですが』

マスターは、シミュレーターで練習するよりも、こうして操縦席に座って、目を閉じて何やら身体を動かしてみたりする方が好きなのですよ。多分、実際に操縦しているつもりになっているのでしょう。イメージトレーニング、というのでしょうか。

ですが、マスターのシミュレーターの成績はあまり良くありません。というか、はつきり言ってしまうのは悪いのです。この成績では操縦者候補には残らなかったというくらいです。

「さつき行つて来たんだけどさ。なんかシミュレーターって、俺に合っていない気がするんだよね。現実感が無いっていうか」

『そうですね。映像もCGですし、実際に体が傾いたりする感覚なども完全には表現できませんから」

「そうそう、感覚でやってるからさ、そう言うのが違うとやりにくい……のかな？」

何故疑問形ですか？ でもマスターの言うことも分かります。私もプログラムやデータ上での戦闘経験はあるのですが、実戦では感覚が全く違っていました。本来ならば完全訓練が行われ、そのあたりの違和感をなくしてから実戦の予定だったそうです。

「それにさ。なんていうか……シミュレーターのナビって、アジアと違って無機質というか。親しみが持てないんだよね」

そう言ってもらえるのは嬉しいです。けれど。

『そう言わないでください。『彼女』は私の同型先行機……私の姉にあたるのですから』

「え？ あ、ああ、そうか。ごめん、お姉さんをそんなふうに言われたら、良い気はしないよな」

『いえ、そういう訳ではありませんけれど』

コンピュータに家族とかはありませんから。

「名前、なんての？」

『プロノイエ、と言います』

「ふーん、不思議な響きだけど、良い名前だ。でも、お姉さんって事は話とかしたりするんだろ？　どんな話話すの？」

『いえ、会話などはほとんどありません。基本的にはシミュレーションの結果などのデータの遣り取りだけです』

「仕事の話だけ？　そういうのって寂しくないか？」

『寂しいという感情はわかりませんが、他に話すこともありませんし。お互いに使用者のデータ収集及びその解析・それを元にしたプログラム最適化しかしていませんから』

「ごめん、俺バカだからよくわからない」

『えーと、ですね。つまりマスターの前回の戦闘やシミュレーター使用者のシミュレーションの内容などをデータとして収集します。そしてその内容の問題点を洗い出して、改善方法やフォローの仕方などを分析し、互いに交換していくのです。私はともかく、シミュレーターは動きませんから、プロノイエにはそれ以外の話題はないのです』

「えーと、あれか。姉妹で机を並べて相談しながら仕事して、上司や同僚の愚痴とか言い合っている感じ？」

『……感覚としては、間違っていないかもしれませんが』

そう……かもしれません。今まで考えた事はありませんでしたが、私は彼女に姉妹愛に近いものを感じているのかも知れません。

『そう考えると、なんだか素敵ですね』

自分には姉がいるのです。そう考えると、ただの機械でしかなかった自分が、まるでそれだけではなくる気がします。

「じゃあ、これからシミュレーターも、もっと使ってみるかな。今までとは違う気持ちで乗れそうだし」

『はい。そうしていただけると『彼女』も喜ぶと思います』

「じゃ早速……って、あれ？　アジア、何それ？」

マスターが指差したのは情報表示用モニター。の、正確に言えば少し上。今頃気付きましたか。

「ヘッドドレス、というらしいです」

確かに情報表示用モニターは私からの情報を表示するためのものですから、私の顔だと言われればそうかもしれません。ですが、こんなものをつけてしまうのは違うと思います。

「なんでそんなものを？」

「先ほど司令が来まして、『メイドさんといえばやっぱりこれよね』とおっしゃって……」

言っておきますが、私はメイドさんではありません。メイドの定義は『雑務に従事する女性』らしいですから、それほど間違っていないのかも知れませんが。

「ふーん？」

マスターは分かっているようでしたが、わざわざ説明するような事でも無いのでだまっておきます。

「ま、いいや。じゃ、俺行ってくるから……」

とマスターが言いかけたその瞬間。

けたたましいサイレンが基地中に鳴り響きました。

「なんだ？」

マスターが聞いてきました。私も実際に聞くのは初めてですが、最重要事項としてプログラムされています。

『第一種戦闘態勢警報……敵襲です！』

不意に通信が入りました。司令部からです。

『マスター、司令部から通信が入っています。繋いでよろしいですか？』

「たのむ」

警報が鳴っている最中は、操縦者が駄目だと言っても司令部からの通信は受けないといけないのですが。

「勇人君、乗ってる？」

通信は司令からでした。

『はい、マスターは現在プロメテウス内にて待機中です』

マスターが変わって答えました。多分、マスターはこの場合どう

したらいいのかわかっていません。

「よかった。前回の二の舞はごめんだからねー」

顔は笑っていますが目が笑っていません。前回の事が余程悔しかったのでしよう。気持ちは分かりますが。

「出現地点は前回と同じく山岳部。勇人君がプロメテウスで待機していてくれたおかげで、今回は山岳部から出て来る前に迎撃出来そうだわ。むしろこっちの方が準備出来て無いくらい。という訳で、準備できるまででありがたいお話でも。いいかしら」

「はい」

マスターが頷きました。二度目とはいえ、直後に実戦が待っているとは思えない落ち着きようです。私にとっては頼もしい限りですが。

「今回、相手はおそらく有人機でしょう。前回の無人機とは訳が違う筈よ。だから……いい？ 絶対に、生きて帰って来なさい。絶対によ？ 一度くらい負けても、次があるわ。でも、死んでしまっっては次は無い。だから、必ず、生きて帰って来なさい」

そういう司令の表情は真剣でした。見ているこちらが息を呑むくらいに。

「……はい。分かってます」

マスターが大きく頷いて答えました。少し表情を緩めた司令としばらく視線が合っていました。

「……ん、準備出来たみたい。代わるわ」

そう言っただけ司令の顔が切り替わって、みのりさんが映りました。

「出撃準備整ったわ。ハッチ開けるわよ」

みのりさんの言葉と同時に、前方のハッチが開いて行きました。「いい、勇人？ 出現場所とか作戦とか、貴方に言っても分からないでしょうからアジアに送っておくわ。細かい事は全部アジアに任せなさい。貴方の仕事は、とにかく行って、思いっきりやって、必ず帰ってくる事。いい？ 必ずよ？」

冷静なみのりさんが、始めてと言って良い程興奮して……という
か、取り乱した様子です。心配、なのでしょう。

「でもさ、みのり」

流石にその様子を感じたのか、神妙な面持ちでマスターが言いま
した。

「……何よ」

その珍しいマスターの表情に驚いたのか、みのりさんが一瞬言葉
に詰まりました。

「こつやつてハッチが開いていくのつて、なんか興奮するよな！

前の時はいきなり外だったから、尚更感動だ！」

「……」

黙ってしまいました、みのりさん。というか、言葉も出ないとい
うのでしょうか。司令室内から失笑も聞こえてきます。この空気の
読めなさ。さすがマスター、凄いです。

『ではマスター、出ます』

ハッチが動き出すと同時にプロメテウスの拘束具が外れています。
前回のデータの分析も済んでいて、歩くくらいの簡単な動作なら私
一人でも出来るようになっていいます。特に今回マスターはどこ
に行けばいいのかも知らない訳ですし。

「まかせる」

言葉とは裏腹に、操縦桿を握り締めてマスターが言いました。話
を聞いていないのではなくて、緊張で勝手に体が動いてしまう様で
した。

喜んでいる、のでしょうか？

2 - 5 アシア2

「あーあー、勇人くん、聞こえているかね？」

移動中、博士からの通信が入りました。

「今回の『災厄』は、恐らく『リーモス飢餓』じゃ。『災厄』周辺の植物が枯渴してるから、多分間違いないじやろう。『リーモス飢餓』は、文字通り

周囲の精気を枯渴させる『災厄』じゃ。時間が経てば、周囲のみならず広範囲に渡って動植物が枯れ、その名の通り飢餓が起こる事になりかねん。毎度の事じゃが、素早い撃破を期待する」

一通りの説明を終えた博士に代わって、モニターに司令の姿が映りました。

「そう言う訳で勇人くん、戦ってたらお腹が減るかもしれないけど、我慢してね？」

「大丈夫です、司令。プロメテウスの生命維持装置は一週間は持ちます。いくら『リーモス飢餓』が相手でも、一戦闘間程度は栄養補給の持続は十分可能です」

「いや、そういう意味じゃないんだけどね」

「はい。こちらもそういう意味ではありません」

マスターの緊張をほぐすために、司令との軽口を楽しみます。もっとも、マスターが緊張などしてはいない事は分かっています。

やがて正面に『リーモス飢餓』が見えてきました。外見は木の形をした人

型。いえ、人の形に見える木型なのでしょうか。絶望を誘うその外

見は前回の『アンドロクタシアー殺人』とは全く違うものの、通じるものがあります。

ただ、有人機であるせいか、『アンドロクタシアー殺人』に比べると幾分人間に近い形態にも見えました。

あくまでも『リーモス形態』だけです。そして、

その手……に見える部分に携えた大鎌。恐らく、『リーモス飢餓』の領分は

全ての実りを刈り取ることだという事でしよう。

現場に着くまでにはほとんど時間はかかりませんでした。とはいえ、出現してから何十分かは経っている筈です。なのに、『リーモス飢餓』

はその場からほとんど移動していません。もしかして、こちらが到着するのを待っていたのでしょうか？

『^{リーモス}飢餓』が長時間その場にとどまり続けた結果でしょう、その周辺の草は枯れるのを越えて既に風化し、立ち枯れた木は白骨のような姿をさらしていました。

その『^{リーモス}飢餓』正面。枯渴した空間で、少し間を開けてマスターは機体を止めました。プロメテウスにとってはつい目の前、でも人間にとっては遥かな距離を置いて、プロメテウスと『災厄』は相対しました。

程なく、前のときと同じ周波数で電波が入りました。発信源は目前、『^{リーモス}飢餓』。発進先はこちら、プロメテウス。

『マスター、『^{リーモス}飢餓』より通信が入っています』

「繋いでくれ」

『わかりました』

前回のようにジャミングをかけているのか通信機の規格がこちらとあっていないのか、一瞬画像がぶれてから通信が繋がりました。

モニターに映ったのは、操縦席……と言って良いのかわかりません。その内部は外見と同じ材質……に見える素材で出来ていて、それが鳶のように絡み合い、たまたま人間が腰を降ろせるようになっていただけのようにしか見えないシートがありました。そして、そこに半分埋もれるようにしていたのは、声から予想した通りの若い女性。「私は『絶望』。今回は音声だけだったからな。始めまして……で良いのか？」

その女性は、金と白の間の色の髪に透けるような肌、そして紅い瞳。

データにありました。それは白子と呼ばれる個体です。身体の色素が極端に少ない異形。体の弱いものが多く、自然界的には弱者とされる個体。でも、それよりも。

「幼女だ！」

開口一番、マスターが叫びました。確かに、外見から言えば10

歳になつてはいないでしょう。でも。

「……幼女言うな」

当然の抗議です。というよりも、まずそこに目が行って、しかも思ったままに口にしてしまうマスターはすごいです。びっくりしました。

「なんで向こうの操縦席に幼女が!？」

相手の言葉を、マスターは聞いていないようでした。そういうところもすごいです。

「だから幼女言うな。確かに造られてから二年しか経っていないが」「二歳か! 何故二歳の幼女がそっちの操縦席に!？」 前の人は一体どこに!？」

「幼女言うなと言うに。それに前回話していたのは私だ」

「そうか、確かに話し方同じだ! すごい大人っぽかったから、もつと年上だと思ってた! すごい!」

「勇人……?」

みのりさんの一言だけで、私もマスターも一瞬で凍りつきました。それまでひとりで盛り上がっていたマスターのこの温度変化。すごいです。

「はい!」

慌ててマスターが返事をしました。きっと、黙ったままだと凄目にあうでしょう。

「わかつてると思うけど、それって犯罪だから」

「ちがつ、違います! そんなんじゃないくて、その、なんとというか驚いただけです!」

マスターは慌てて弁解します。マスターにしては的確な対処です。きっと、今までの経験の成果でしょう。はっきり言って必死です。実際にどんな目に合うのか分かりませんが、みのりさんのあの声だけで関係ない私までとにかく謝らなくちゃという気になります。

「……いいか?」

「あ、ごめん! ……で、なんだっけ?」

本気です。びつくりです。操縦者の状態管理用の各種測定器のデータによると、本気で何をしていたのか忘れています。

「……随分と、余裕なのだな。これから殺し合いをしようというのに。それほど自信があるのか？」

「いや、そういう訳じゃないんだけどさ、それに殺し合いとかしいし」

「ちよちよつ、ちよつと待って！」

通信機から司令の声が聞こえて来ました。何か妙に興奮しています。

「あなた、あなた……人間なの？」

「違う」

司令の質問に、『絶望』は冷静に答えました。特に何かを感じている風でもなく、です。

「違うって……だって、どう見ても人間じゃない！？」

「それはそうだろう。私は人間の遺伝子を元に造られたのだからなだが『造られた』分際で人間を名乗るなどおこがましいし、そもそも遺伝子自体に手を加えられているから人間とは言えん」

「なら……あなたを造ったのは、誰？」

「それについては答えることを許されていないし、答えるつもりもない」

「じゃあ、あなた達の目的はなんなの？」

「答えるつもりはないと言っただろう？ これ以上無駄な時間を取らせるようなら、こちらから一方的に行くが？」

『絶望』の有無を言わせない口調に、司令が口ごもりました。このまま話を続けようとするれば、言葉どおり一方的に襲い掛かってくるでしょう。それはプロメテウスを無用な危険にさらす行為です。

「……わかったわ勇人くん、割り込んでごめんなさい。後は任せるわ」

そう言って、司令の声は終わりました。でも、通信機の方こうから固唾を吞んでいる様子が分かります。

後に残ったのはプロメテウスと『^{リーモス}飢餓』、それに乗るマスターと『絶望』だけです。

「では、始めよう。楽しませて貰えることを期待する」

「あー、そうだ、始める前に聞いておきたい事があるんだけど」

普通の人ならそれだけで震え上がるでしょう『絶望』の声をあつさりかわして、マスターが聞きました。その調子は極めて普通です。凄いです。

「なんだ？ 戦いの前の手向けだ。答えられる事ならば教えよう」

司令に対してとは明らかに態度が違っています。基地にいる司令と直接戦う相手との差でしょうか。

「そっちの操縦席ってどこにあるんだ？」

「なんだ？ 操縦者を狙って効率よく戦おうという事か？」

「いやさ、操縦席の場所がわかれば、間違っって怪我させる事はないだろ？」

「ふ……ふふふ、なるほど。これから殺り合う相手の命の心配をするか。はははっ、なるほど、面白い」

『絶望』が笑いました。心底楽しそうに。まるで年相応に見える無邪気さで。

「良かるう、教えてやる」

そう言うのと同時に、『^{リーモス}飢餓』の頭部……と思われる場所の前面が開きました。その中、シートに座ったままの人影が見えます。遠いけれど、その人の髪の色は間違いなくモニターに映るものと同じです。モニターの映像からすれば、操縦席内部全てが外観と同様の形状になっているのでしょう。その中にいる、それだけで十分な『絶望』。それをなんでもない風に、少女は玉座に座る少女王の様に優雅に、峻厳に存在していました。

「私はここだ。狙うなり、避けるなり好きにしろ」

『絶望』が不敵といった表情で笑います。操縦席を狙われてもいいと、むしろ狙う卑劣さを嘲笑おうというような微笑み。

「そうか、わかった」

『マスター！？』

マスターが何の操作をしたのか気付いて慌てて声を上げました。でも、マスターはそれを気にすることもなく、操縦席の扉を開けてしまっていました。

お互いの機体は巨大です。人間の感覚からすれば、遙かな距離と言えるでしょう。それでも、二人とも間を隔てるもののひとつとてない状態で、直接対峙していたのです。

『マスター！　ここは^{リーモス}『飢餓』圏内です！　でなくとも『災厄』前で生身を晒したら！』

でも。『災厄』を前にして、マスターは変わった様子はありませんでした。その姿を間近で見ただけではなく、既に瘴気の範囲内。凄い精神力です。

マスターは叫ぶ私を無視して、立ち上がり、プロメテウスから身を乗り出しました。

「こっちはここにいます。狙うなり外すなり好きにしてください」

マスターは、相手を真っ直ぐに見据えていました。相手の方も、視線を逸らすことなくマスターを見詰めています。

なんだか、悔しいです。こうして直接向き合っている二人を、私はカメラ越しに、モニターに映る映像としてしか見られないのですから。

視線を合わせた二人は、そのまま視線を外さずにいました。お互いに全くの無防備です。どちらかが機体の腕を操作すれば、そのまま相手の命はなくなるという状態でした。

まして、いくら精神力が強くて^{リーモス}も『飢餓』の瘴気の中、マスターが衰弱を続けていくのが私の計器でもはっきりと分かります。

先に口を開いたのは『絶望』の方でした。

「……何のつもりだ」

「教えて貰ったんだから、今度はこっちの番だろ？」

当然のように言うマスターに、『絶望』はまた黙り込みました。マスターが何を考えているのか図りかねている様子です。

マスターが何を考えているのかなんて、そんな事私にもわかりません。でも、『絶望』はそれで納得したようでした。

「そうか。道理だ」

うん、とうなずいてマスターが言いました。

「だろ？」

「……ありえない」

出撃中は常に接続されている司令室からの通信からは、みのりさんの咳きが聞こえていました。

「バカなのは知ってたけど、どういっつもりよ、これは！ プロメテウスに乗ってるだけで十分危険だって言うのに、あれじゃ殺してくださいと言っているようなものじゃない」

「私は、わかる気がするけどな」

普段からは想像できない興奮の仕方のみのに対して、司令の声は落ち着いていました。

「始めての有人機、いわばこれが始めての『戦い』だもの。筋を通しておきたいって言う気持ち、わかるわ」

「しかし司令、これはあまりにも危険です！」

「ええ、それとこれとは別。勇人くんの命を預かる身として、この行為は認められません。アジア、操縦席ハッチ強制閉鎖」

私としては、もう少しマスターのしたいようにさせてあげたいと思います。でも、これ以上『災厄』に身を晒し続けるのが危険な事だともわかっているのです。

『……マスター、ハッチ閉じます』

「ああ、もう十分だ」

マスターがシートに腰を降ろすのを待たずに、私は操縦席の扉を閉じました。それを受けるようにして、『^{リーモス}飢餓』の操縦席も閉まっていきました。

私は扉が閉まりきる前からプロメテウスの生命維持装置を最大で稼働、衰弱が進んだマスターの身体に栄養を送り、奪われた体温を上げました。普通の体力と精神力なら、既に衰弱死していてもおか

しくない距離、時間だけ『^{リーモス}飢餓』に相対していたのです。この程度で済んでむしろ不思議なくらいなのです。

「勇人くん、気持ちはわからないじゃないけど、相手は人間じゃないよ？『災厄』なのよ？プロメテウスに乗っていたってその影響は完全には防ぎきれないっていうのに、今後勝手に操縦席ハッチを開く事は絶対禁止です。アジア、扉はロックしておくように」

私としても、マスターの命が最優先なのです。言われるままに扉にロックをかけました。

「いや、流石に理由がなきゃしませんって」

マスターはそう言いますが、司令は続けました。

「理由があればするから言っているんです」

私もそう思います。同じ状況になれば、間違いなく同じ事をするでしょう。

「いい、勇人くん？ 今回事も無かったのは運が良かったのだと思つて。次は命の保障は出来ないわ。……私には、貴方を無事に帰還させる責任があるの」

「えっと……気を付けます」

「本当に、頼むわ」

やる気がない答えと信じてない返事を交わして、マスターと司令の会話は終わりました。もしかしたらこの二人、相性がいいのかもしれない。

「……ごめん、待たせた」

「いや。良い」

マスターの言葉を受けて、『絶望』が答えました。それでも、動く気配はありません。何かを待っているようです。こちらとしては、都合が良いのですが。

「アジア、勇人の様子はどう？」

『全ての値、まだ低めですが正常値の範囲まで回復しました。戦闘行為に問題はないと思われます。……勿論、私が全力で補助します』

「では……もう良いな？」

『絶望』が言いました。どうやら、待っていたのはマスターの回復だったようです。

「行くぞ」

その言葉と同時に。『^{リーモス}飢餓』は、一瞬でその距離を詰めました。

「速っ……！」

司令の呟きが聞こえました。それが追いつかない程の速さ。ですが、前回のデータによれば、避けるだけならこの程度たいしたことはありません。マスターは悠々とその攻撃を、

避け、ません。

肩に大鎌が食い込みました。

「なっ……！」

司令室から司令が絶句する声が聞こえてきました。すみません、私も絶句している最中です。

「……っによつてるのよ、あなたは！」

一番早く我に返ったのはみのりさんのようでした。すごい興奮具合です。明らかにキレています、みのりさん。普段では絶対にありえない言葉遣いです。さっきの今でのこの無茶具合。当然です。ハウリングがかかる程の大声で、耳が痛いです。

「こんなもん、避ける必要はない！」

「肩！ 裂けてるって！」

肩の装甲版が裂けています。内部に深刻な影響は無いようですが、「こんなものは効かん！」

「だから裂けてるっての！」

はい、裂けてます。深刻ではありませんが、少し動きが鈍くなるかも知れません。

「おい」

「聞け！」

マスターはモニターの『絶望』の方へと視線を向けました。向こうではまだみのりさんが何か言っていました。聞くつもりはない

ようです。

「……お前さ、俺のことナメてるだろ？」

びっくり、と『絶望』の眉が上がりました。

「ここは、腕の一本も持つてく場面だろうが？　それが、なんだコレは？　やる気あるのか？」

確かに、全くの無防備で攻撃を受けているのです。この一撃で終わっていても不思議ではない状況だったはずです。

「何言ってるのよ、勇人！　真剣勝負をしたいっていう気持ちは分かるけど、今はそんなこと言っている場合じゃないのよ？　この戦いに貴方だけじゃない、沢山の人の命がかかっているのよ？　相手にやる気がないなら尚更、今のうちに勝負を決めておくべきでしょう！？」

「だからこそだ！」

マスターの声に、みのりさんがびっくりとしました。珍しく今日はマスターが優勢です。

「だからこそ、どう結果が出てもお互いが納得できるようにしなきゃいけないんだ！　本気じゃない相手とやってたんじゃ、どんな結果になっても納得なんかできないだろう！」

『そうです！　マスターの言うとおりです！』

私も叫びました。

『マスター、思い通りにやってください！　ご自分の納得のいくように！』

「助かる、アシア」

マスターの声が嬉しそうに弾んでいました。マスターに喜んでいただく、私も嬉しいです。

「……そうだな。決して舐めていた訳ではないが、今のが本気でなかった事も確かだ。謝罪しよう。これからは、本気で行く」

「あー、あんまり本気出してくれなくてもいいかなー」

ぼそりとつぶやいたのは司令でした。

『……司令』

司令の立場からすれば、それは仕方ない気持ちだと思います。でも、真剣な二人を前にそういう態度はいかがでしょう？

「ひーん、だってアシアだって本当はそう思ってるんじゃないかー」

『駄目です。マスターが本気でとおっしゃっているのですから、本気でないと』

「……アシアが壊れた」

壊れてません。

いえ、壊れているのかもしれませんが。少なくとも、生まれた時点での教育では勝ち負けの手段の是非なんていう判断項目はなかったのですから。

でも、壊れているのだとしてもそれでかまわないとも思うのです。それで自分が満足できるなら。それでマスターが満足するのなら。

……やはり、壊れているのでしょうか。

「行くぞアシア！」

「イエス、マスター」

マスターが足のペダルを踏み込んで足裏の高速移動用ローラーを起動しました。わずかしかなかった『^{リーモス}飢餓』との距離は瞬時につまり、プロメテウスのドリルと『^{リーモス}飢餓』の鎌とが接触、辺りに凄まじい火花が散りました。

もつとも破壊力に優れた先端部を避けているとはいえ、高回転を続けるドリルと接触して刃こぼれも起こさないとは、『災厄』恐るべしです。

「どうした？ 本気で来いと言っておいて、この程度ではないだろう？」

モニター越しに『絶望』がねめつけます。

「アシア！」

「イエス、マスター！」

答えると同時に私はドリルの回転数を上げました。流石に堪えきれずに鎌をはじかれてよろける『^{リーモス}飢餓』。それに向かってプロメテ

ウスはドリルを突きつけました。避けようがない体制。

しかし『^{リーモス}飢餓』は崩れる姿勢を直そうとはせず、むしろ勢いをつけてそのまま、あろう事かバク転で距離をとり……

『……え？』

ありえません。あの巨体、あの重量をバク転させるだけの出力、関節可動域、姿勢制御技術の高さもさることながら、何故それだけの課題を押してまでバク転など出来るように作らねばならなかったのか。理解出来ません。

「アジア！」

『え……あ、失礼しました』

一瞬呆けてしまったようです。戦いの最中だというのに。

『……『災厄』、予測できない動きをする可能性が高いようです。お気を抜かないようにお願いします』

「アジア、こっちもだ！」

『はい？』

「こっちもバク転だ！」

そうでした。マスターはこういう人なのでした。

『それも良いのですが、マスター、それよりも『災厄』はどんなさるおつもりですか？』

「……ああ」

忘れていたようです。

バク転で距離を取った『^{リーモス}飢餓』ですが、すぐに距離を詰め、鎌を振りかざしました。重いドリルではそれを受け止めるのには間に合いません。マスターは、とっさに左の拳をその刃に叩きつけました。左手が引き裂かれる、と思ったその瞬間。

硬い金属音と共に、プロメテウスの左拳、正確にはそこに装着されたナックルガードが、『^{リーモス}飢餓』の大鎌を阻んでいました。

「なんだこれ！ いつの間に！」

マスターが叫びました。

「そっじゃ！ 前回の轍を踏んで……」

『左手にナックルガードをつけました！ そちらの着脱は私の方です。』
「しますから、マスターは思う存分やってください！」

「わしの台詞……」

ナックルガードは、単純に言えば拳を護るためのただの合金の板です。普段は手の甲側に回されていて、指の稼働の邪魔にならないようになっています、必要に応じて装着されるという単純なものです。ですがそれは重量のためにプロメテウスの装甲には使えなかった、それよりも遥かに硬い金属で出来ていて、稼働部分の多さから強度にかける拳よりもずっと強い武器なのです。

威力のある代わりに重いドリル、威力に欠けるかわりに軽いナックルガード。両の手に武装を持ったプロメテウスは戦力あつぷ、当社比1.125倍です。あまり変わりません。

ですが、ナックルガードは、というかドリルと並んでナックルガードもマスターの性に合っていたようです。新しい武器を得たマスターの二刀流は見事だったと思います。

しかし『絶望』の鎌の腕もマスターとほぼ同等。しばらく熾烈なせめぎ合いが続きました。

それでも、高速回転するドリルを捌くのは至難の業なのでしょう。鎌がドリルにはじかれたその一瞬、『^{リーモス}飢餓』の姿勢が崩れました。それはわずかな隙、本来なら間合いを詰めるだけで終わってしまう程度の時間。

「アジア、出力全開！」

『イエス、マスター！』

マスターが足元のペダルを思い切り踏み込むのに合わせて出力を高速移動用ローラーに集中しました。爆発的なエネルギーを得たローラーの回転によってプロメテウスは強烈なGと共に急加速し、瞬く間すらなくトップスピードに到達、『^{リーモス}飢餓』に向けて突き出したドリルは高速回転の唸りを上げつつ突き進みます。とっさに防ぐように構えられた鎌を打ち砕きながら、ドリルは『^{リーモス}飢餓』胸部にめり込んでいました。

勢いの付いたプロメテウスは、『^{リーモス}飢餓』の木片に似た破片を撒き散らしながらその向こう側へとつきぬけ、100M以上進んでようやく停止しました。

そして振り向いたとほぼ同時。『殺人』の時と同様に、『^{リーモス}飢餓』に開いた穴の周囲の空間が歪み、その穴めがけ、『^{リーモス}飢餓』は飲みこまれて消えました。

「あー！」

『どうしました、マスター』

「名前！ 技の名前叫ぶの忘れてた！」

……そうですか。

「つて、違う！ もっと重要な！ 乗っていたろ、確か、幼女！」

確かに、『絶望』が乗っていたはずです。マスターは操縦席は避けて攻撃していましたが、こうなっては同じことです。

こういう時は確か、

ナムー。

「……だから、幼女言うなと言うに」

「な……どこだ！」

「勇者、上よ」

みのりさんの声にマスターが空を見上げました。その上空に、『^{リー}飢餓^{モス}』の頭部……に見える部分がそのままの形で浮かんでいました。どうやら、頭部自体が脱出装置になっていた様です。

「うむ、なかなか楽しかった。今日のところはこの程度で十分だろう。次はもう少し楽しませてくれると嬉しいが。……それまでに機体と身体を癒しておけ」

追いつく間もなく、『絶望』は上空高くその姿を消していきました。地上戦専用のプロメテウスでは追い付く事は出来ません。残念ながらミサイルを飛ばしてくれる味方ロボットもいませんし。

「逃げ……られた、わね」

司令が言いました。はい。

「そのようですね。しかし、撃退という当初の目的は果たした訳で

すし」

「そうね。では、戦闘状態解除。勇人くん、お疲れ様。帰投してください。……いい？　今回はアレだったから、特に身体に気をつけるのよ？」

その司令の声を聞きながら、マスターは思い出したように脱力して、シートに身体をあずけました。そして、力が抜けたようにため息をひとつ。

『災厄』に直接向き合ったのです。

このくらいで済んで、むしろ良かったくらいなのです。

幕間 『神託の男神（アポロン）』 2

幕間 委員会 2

「『絶望』との初戦は無事済んだようだな」

「はい。未来予測と逸脱した結果は見受けられませんでした」

「初の有人機戦ということでもっとも危惧していたのだが、安心したよ。……だが、最初に操縦席のハッチを開き合ったのはどういう訳だね？」

「『絶望』の意図ははっきりしません。しかし、前後の会話から考えて彼を軽く見ていたことからかと」

「確かに、この会話記録からすると、彼を舐めていたようだ。では、彼の方は？」

「何も考えていないからでしょう。相手が開けたから自分も、その程度かと」

「……無茶苦茶だな」

「はい、無茶苦茶です」

「しかし、……いや、いい。同じことを言っても仕方が無い」

「はい」

「……ところで、戦闘中に彼の人格が換わっていたようだ」

「いえ、普段からこんなものです。……ですが、確かに性格にある程度の偏重が見られたのは確かです。『ヒュスミナー戦闘』に直峙したのが最大の原因だと思われますが、恐らく、操縦技術を脳に直接書き込んだのが要因となったのでしょう。その記憶部分が使用された場合に戦闘意欲が刺激され、このような結果をもたらすのであろうと。現在、脳神経と精神の双方からの調査が行われています」

「問題はないのかね？」

「問題と言いますと？」

「つまり、そのことによる計画への影響や、最悪彼の命にかかわる

ことにはならないのかね？　今彼を失う訳にはいかないのだが」

「生命への影響は、現在のところ考えられません。計画への影響ですが、好戦的になり勝利に対して貪欲になると言うのは、むしろ望ましいと思われます。検査の結果を待たねばなりません、いずれにしてもさしたる問題ではないかと」

「そうか。検査結果はこちらへも回してくれたまえ。今回は以上だ。では、より一層の努力を期待する」

「はい」

3 - 1 高松司令 1

「うー、疲れたあ」

んー、と伸びをする。堅く強張った肩と背中に血が流れてくるのが分かる気がする。

今いるのは専用の執務室。流石に極秘扱いの報告書をみんなのいる司令室で作る訳にはいかない。そのために、専用の執務室が用意されているのだけだ。

「執務室なんていらなから、事務仕事なくしてくれないかなあ……」

無理だと分かっている事をつぶやいてみる。空しくなった。

やれやれ、と肩をさする。事務仕事は不得手なのだ。特に報告関係とかは、意味がある事だとは思えない。それで戦いが有利になる訳でもなく、それで所員たちの士気が上がる訳でもない。所詮はお偉いさんたちの自己満足なのだ。

「ま、不安だつていう気持ちもわからないじゃないけどねー」

不安なのは、みんな同じなのだ。次は負けるかもしれない。その結果どうなるのか。何が起こるのか。

でも。安全な場所にいるお偉いさん達等は正直な話、どうでもいい。基地にいる私達ですらまだいい。

負ける事、イコール命の危険、という勇人くんはどうなのだろうか？

「……私には、貴方を無事に帰還させる責任があるの」、かあ」

脱力。椅子の背もたれに身体をあずける。

その言葉に嘘は無い。

勇人くんにも、それ以外の誰にも犠牲になどなって欲しくは無い。しかも、今、プロメテウスと勇人くんを失うことは出来ない。その事により、更に被害は大きくなるだろうから。

でも、もしも。

敵が最後の一体であれば。あるいは『災厄』を倒せるだけの戦力の目処がついていて、そして勇人くんを失うに値するだけの成果……例えば多数の犠牲を防ぐなどの名目があれば。

……私は、勇人くんに『死ね』と命令することを躊躇わないだろう。

「口ではカッコいい事ばかり言つて、心の中じゃそんなのか。……最低だ、私」

それが現実だとわかっていても、二人を救うためにひとりを切り捨てるのが『責任者』の役目だと分かっているにしても、それでも割り切れるものではない。

椅子をぎしぎしと軋ませながら、空を仰ぐ。

でも、ここから見えるのは閉塞された天井だけだった。

気が滅入る。でも、実際に空が見える場所では、空を見上げることは出来ない。

眩し過ぎるのだ。

「コーヒーでも、飲むかなあ」

立ち上がり、執務室を出る。誰か呼べはコーヒーくらいはすぐに持ってきてくれるが、そこまでして貰うのは気が引けるし、何よりコーヒーを飲みたいというよりは気分転換をしたいのだ。もっとも、休息室まで行つてコーヒーを啜ったくらいでは気が晴れないことは分かっているけれど、それくらいしかできる事はない。

でも、執務室を出てすぐ。

「……あのー司令？」

背後から声をかけられる。勇人くんの声。驚いた。今一番聞くなが辛い声。

「ん、なあに？ 何かわからないことでもあるの？」

努めて明るい声で、動揺していない風を装いながら振り向いた。

勇人くんはなにやら困ったような、戸惑ったような表情をしていた。むしろこちらが戸惑う。

「えーつとですね、最近、何故かみのりの機嫌が悪いんですけど……」

…」

「あー、まあ、ねえ」

それは見ていればわかる。勇人くんは、いつ死ぬかわからないと言っている状態なのだ。しかも前回のあの無茶具合。それで機嫌が良くなる訳はない。

「で、色々考えてみたんですけど……全然理由とか思いつかなくて直接聞くのは怖いし、仕事の事で何かあったんなら、司令なら何か知ってるかなって」

面食らう。わからない訳がない。みのりちゃんの態度は、あんなにも分かりやすいのに。

「えーっと……本気で、わかんない？」

「はい。さっぱりです」

きっぱりと言う。むしろ気持ちが良くくらいだ。でも、この分かりやすい状況でもわからない人に、どうやって説明するべきか。

「例えば、そうねえ……もしみのりちゃんがプロメテウスの操縦者だとしたら、どうする？」

「そりや止めさせますよ。みのりにそんな危ない事はさせられませんが」

「じゃ、その操縦者になった勇人君に対して、みのりちゃんはなんて思ってるかしら？」

「えっと……んー……わかりません」

あえて言ってしまうおう。駄目だ。この人は駄目だ。本格的に駄目だ。これに今まで付き合ってきたみのりちゃんの苦勞を思っで目頭を擦る。

「貴方が思うのと、同じ事を思っている筈よ。> ruby<>rb<機体>/rb<>rt<プロメテウス>/rt<>/ruby<に乘るのは危険すぎる。今すぐにでも止めて欲しい。でも君が>ruby<>rb<機体>/rb<>rt<プロメテウス>/rt<>/ruby<に乗りたいう気持ち、それから>ruby<>rb<ここ>/rb<>rt<コーカサス>/rt<>/rub

y<の人間として、すぐれた操縦者を辞めさせる訳にはいかないっ
ていう思いとで板ばさみになってるのね。だから、機嫌が悪いくら
いは我慢してあげないと」

「そうか、みのりは俺の事を心配してるのか……」

本気で始めて気付いたという表情。ああみのりちゃん、私涙が止
まりません。

「それを解決するには君が>ruby<>rb<機体>/rb<>
rt<プロメテウス>/rt<>/ruby<を降りるしかない。
でもそうなればなったで、君の意思を曲げさせた事を後悔するでし
よう。自分の気持ち、それもどうしてそうなのか本人もわかってい
る筈のことだもの。自分で解決するしかない。だから気持ちの折り
合いがつくまではそつとしてあげる方が良いわ」

「いえ、それは駄目です！」

「え？」

「このままじゃみのりだって良い気持ちじゃないだろうし、俺だっ
て嫌です。だから、今、とことん話し合います！ ではありません
ございました」

じゃあ、と手を上げて去って行こうとする勇人くんを呆然と見詰
める。

「全く……かつこいいんだか悪いんだか」

ため息をひとつ。まあ、こういう真っ直ぐなのは、見ていて気持
ちがいいのは確かだ。

だからこそ、彼に対しての罪悪感は募っていくばかりなのだが。

「ね、ちよつと待って」

「はい？」

すでに歩き始めていた勇人くんは、私の声に立ち止まって振り向
いた。

「話しても無駄だと思っわよ」

「何故ですか？」

「言っただしょ、みのりちゃんもわかってるのよ。それでも納得で

きないからああいう態度になってるんだと思うの。分かっている事をあらためて説明されても怒らせるだけだわ」

「えーと……そういうもんですか？」

「そう。だから、お姉さんがひと肌脱いであげるわ」

自信あり気に微笑んで見せる。その行為に、少しでも罪滅ぼしをする事で自分が楽になりたいという気持ちが無い訳ではなかったけれど。

「ま、お姉さんに任せておきなさい」

「と、いう訳で！ 勇人くんの歓迎会を兼ねた慰安旅行を決行します！」

私がそう告げた瞬間、わっ、と歓声上がる。それはもう、『災厄』を撃破した時を超える大歓声。

「……は？」

その中で、みのりちゃんひとりだけが違う反応だった。……予想通り。

「司令。もう一度お願いします」

「だから、慰安旅行よ。勇人くんの歓迎会もまだだったし、ちょうどいいでしょう？ 夏だから海水浴とか考えたんだけど、こっから海って遠いし、やっぱりここで慰安って言えばやっぱり温泉よね」

勿論、多分に私情が入ってるんだけど。

「な……司令、何時『災厄』が出現するか分からない状況で慰安旅行など」

言い合いでみのりちゃんに勝てるとは思えない。というか、みのりちゃんにペースを取られると迫力負けしてしまうのだ。それを押さえ込むには勢いしかない。

「そうね。みのりちゃんの言う通り、何時『災厄』が出現するか判らない状況だわ。所員は全員常に臨戦態勢、気の休まる時なんてない。だからこそ、全て忘れてリラックスできる時間をつくる事も大切なのよ？ まして誰も一人で戦う事なんて出来ないの。例えば勇

人君が整備班の人と仲良くなっておけば、整備班の人たちも勇人くんのためにつて、今まで以上に頑張つて整備をしてくれるかもしれないのよ？ それは勇人くんのためにもなるのよ？」

「……司令。ご高説はありがたいのですが、そう言うときくらいは温泉ガイドを手放して貰えますか？」

「……あはは」

笑つて誤魔化すが、みのりちゃんの視線は厳しいまま。でも、手ごたえはよかった。なんと言つても勇人くんのため、つてのがよかった。たつた今思いついた口からでまかせだけど、確かにその通りだと自分で納得。

「それでも色々考えてるのよ？ 海にも行きたいなー、と思つたけど、流石に県外まで行つちゃうと防衛上問題あるでしょ？ だから近場の温泉にしようかなつて。勇人くんも前回 >ruby<>rb<『飢餓』>/rb<>rt<リーモス>/rt<>/ruby<のせいで底疲れしちゃうつて、お医者さんじゃ治らない類の疲れな訳だし、ほら、温泉なら一時間もあれば帰つてこられるでしょ？」

「一時間あれば街は壊滅してます」

「……あうう。で、でもほら、もう予約も入れちゃつたし、みんなもこんな楽しみにしてるし、ね？」

応援を、とばかりに他の所員たちにふる。他のみんなも慣れたもの、打ち合わせた訳でも無いのに、みのりちゃんに向かって視線で『温泉行きたいよう』『駄目なの？ ねえ駄目なの？』とか訴えかけている。みんなやるなあ。

そして、それを無視出来るほど、みのりちゃんは鬼ではない。

「……わかりました。ただし、緊急時の移動手段の確保と最低限の人員を残す事だけは確実にお願いします」

「ええ、もちろんだわ！ やっぱりのりちゃん愛してる！」

大げさにみのりちゃんに抱きつく。

「まあ、言い訳がそれっぽかったですから、今回は騙されておきます」

はははっ。ばれてるわ。

3 - 2 植村中尉

病室のベッドの上で、植村中尉は手にした資料を読んでいた。上田が持つて来たばかりの神成勇人の資料だ。それを何度も何度も読み返す。

「なんだこいつは、なんなんだ！？ どこも見るべきところのない普通の、いやそれ以下の奴じゃないか！ ……なのに、なんだ、これは！ なんの努力も、訓練も、していないってのに、なんだ、これは」

ありえない。全くありえなかった。こいつは素人だ。間違いない。格闘技の有段者らしいが、そんなものは軍ではむしろ当たり前だ。それなのに、あれだけ訓練を受けた俺よりも……認めよう、俺には出来ない操縦をしている。

かと思えばシミュレーターの結果は散々たるものだ。

一貫性が無い。どんな奴なのか、捕らえようが無い。

そうだ。こいつは実戦でだけ結果を残している。それ以外では、俺の足元にも及びはしない。

「そうだ、実戦だ。俺が実戦に出さえすれば、あんな奴などなんも問題もないことを証明してやれる！」

そうだ。自分はまだ実戦に出てはいない。訓練と実戦が違うのは当然だ。自分だって、実戦ならば訓練などよりもずっと良い結果が出せる。そんな事は疑いようのない事実だ。

だが。

操縦者から外された。その事実が変わらない。

実力を示そうにもその機会が無い。あの男に問題でも無い限りは自分の出番は無いだろう。あの男が問題を起こすか、怪我でもするのを待つか？

冗談ではない。

植村は壁を叩いた。他人任せ、運任せは植村のやり方では無い。

いつだって自分の実力での上がつて来たのだ。

今度だけそうしない理由は無い。

奴が怪我を……いっそ、死んでくれれば問題が無くていい。

植村は考え始めた。あの男に消えて貰う方法を。

自分の身体も万全ではない。考える時間はたつぷりとある。

3 - 3 高松司令 2

帯をきゅつと締めて、よし、準備完了。

温泉と言えば浴衣、その宴会場と言えばそれ以上に浴衣。

それにしても浴衣は良いよねー。楽だし涼しいし、なんと言つても漂うこの女の色香。我が事ながら惚れ惚れします。あとは見せる相手さえ居れば完璧なのに。ちえつ。

「お待たせ、みのりちゃん。じゃあ行こつ……か」

と振り向いて硬直。流石に浴衣は着ないかな、とは思っていたけど、何故にスーツ姿ですか？

「えーと？ 確か、『民間人に威圧感を与えないために制服着用禁止』って言つてあつたよ……ね？」

どうせ制服で来るつもりだろうからと先手を打った筈だったのですが。

「はい。ですから、こうして私服ですが」

違う。確かに制服ではないけど、普通それは私服姿とは言わないと思う。

「いや、これから宴会な訳だから、もうちょっと楽な格好の方がいいんじゃないかな、とか」

もつとくつろいで貰わないと、勇人くと仲直りしてもらつた計画がやりにくくなるのに。

「お気遣い無く。これで充分楽な格好ですから」

その様子は別に無理をしているという感じでは無い。

「あー……そうですか」

何を言えと？

「まあ、遅れないうちに行きますか」

みのりちゃんをはじめ、同室の女の子達を引き連れて宴会場へ向かう。気心知れた司令室付きの娘たちだから気楽なものだ。みんな楽し気にきやいきやい笑いあっている。喜んでもらっているようで

良かった良かった。

「あ、勇人くん」

宴会場の前でうろうろしていた勇人くんに声をかける。待っているように前もって言うておいたのだ。忘れていなかったようで胸をなでおろす。

「ちょーどいいや、一緒に行こっか」

わざとらしく言う。仕組まれてたくらいの事はみのりちゃんも気付いただろうからそんな事は気にしない。

「あ、はい」

勇人くんの視線はちらちら私の後ろに向かっている。見なくてもわかる。みのりちゃんが気になって仕方ないのだ。勇人くんには、仲直りの話とかこっちからは始めないようにと事前に言い含めてある。それで何と声をかけて良いのか考えつかないでいるのだろう。

「とりあえず入るっか」

促して宴会場へと入る。

「わ、思ってたよりずっと広い」

多分、このホテルで一番広い部屋だろう。

「基地の半分だけとはいえ、50人からいますから」

別に何でもなさそうにみのりちゃんが言う。そうか、そんな人数になってたか。自分のとこの事ながらびっくり。

「とりあえず座って座って」

既に部屋には結構な人数が集まっていたけれど、上座だけは開けられている。多分私がまだ来ていなかったから。基本体育会系だからねえ。

「じゃあねえ、まず主賓の勇人くん上座ね。で、お世話係のみのりちゃん隣。私はその隣って事で」

有無を言わずに一方的に決めていく。強引に押し切る時の常套手段。みのりちゃんは複雑そうな表情をしたけれど、一応筋は通っているし反対するだけの理由もないからだろう、大人しく指示通りに座った。とりあえず一安心。これで嫌だとか言われたら、また微

妙な空気になりかねなかったところだ。

みのりちゃんも座布団の上にきっちり正座している。それに付られた訳ではないのだろうが、勇人くんも正座だ。行儀だけは良いんだよね、この子。

さて、どうしよう。残りの席の数からすれば、それほどしなくても集まるだろうけれど、それまでどうするか考えてなかった。とりあえず何か話させないといけないのだけれど、内容が思い浮かばない。沈黙が痛い。うう、こういうのを針の筵っていうんだろうか。

なんとかその時間をやり過ごし、席が全部埋まった事を確認して立ち上がる。

「みんな揃ってるわね？ 居ない人は手を上げてください」
しーん。緊張ほぐしがてらの一発、滑りました。

「えーと、みんな知ってるの通り、既に実戦が始まっています。きつとみんな少なからず不安や緊張を感じ、ハードワークに心も身体もギリギリのところにあると思います。でも、それが分かっている私も私には頑張ってくださいとしか言えません。自分たちに与えられた職務を果たしてくださいと、そうとしか言えません」

周囲はしんとしてしまっていた。雰囲気壊しちゃったかな。でも、これは言っておかなければいけないこと。

「でも！ ずっとそうやってたらもたないよね。だから、今日だけは全部忘れてください！ 全部忘れてリフレッシュする、休む事も仕事のうちです。だから、今日は思いっきり騒いで楽しんで、破目外してください！」

わっと歓声が上がる。やっぱりみんな楽しみにしてくれていたみたい。良かった良かった。

「えーと、今日は一応歓迎会という名目になってますので、主賓の勇人くんから一言お願いします」

と勇人くんを指し示す。全員の視線が勇人くんに集中した。けれど。

勇人くんは料理に興味津々だった。

「えーと？」

一気にテンション↑

「勇人」

みのりちゃんが肘で突付く。

「え？」

こっちを向いたけれど、その視線は料理が気になって仕方ない様子だった。

「えーとね、これは勇人くんの歓迎会な訳だから、挨拶とかして欲しいなー、って思うんだけど」

「えーと、挨拶ですか？」

「うん、お願いね」

不安に駆られながら座る。失敗しただろうか。少なくとも、事前に言っておくべきだったか。

「えっと、喋るのあまり得意じゃないので少しだけ。……ここが何のためにあるのか、何をするところなのかって初めて聞いた時、俺は凄いつて思いました。俺が将来についてとか当たり前の事で悩んでいた時、こんな風に前を見据えて一生懸命に進んでいる人たちがいたんだって事、凄いつて思いました。だから、その仲間に迎えて貰えた事、とても嬉しいです。俺にどんな事が出来るかわからないけど、出来るだけの事をするつもりです。ですから、よろしく願います」

そう言つて深々と頭を下げる勇人くんは拍手が浴びせられた。

短くて端的だったけど、いい挨拶だったと思う。

「70点」

周りに頭を下げながら座った勇人くん、みのりちゃんが声をかけた。

「まとまりがいまいちだった。でも、気持ちはこもってたわ。だから70点。一応合格ラインね」

「うん。ありがとう」

みのりちゃんはまだ勇人くんの方を見ようとはしなかったけれど、
勇人くんは本当に嬉しそうに笑った。

「うんうん、なかなか良かったわよ。という事でとりあえず一杯ど
うぞ」

「あー、いや俺飲めませんから」

ま、勇人くんは飲むタイプには見えないし、そもそも今回の標的
は勇人くんではないのであつさり引き下がる。

「じゃ、みのりちゃんどうぞ」

「いえ。非常時ですから」

この返事も予想通り。

「ちよつとくらい良いでしょー？　そのために基地に人員を残して
きた訳だしー」

「いいえ。いつ、何が起こるかわかりません。司令は好きなよう
に楽しんでください。ですが私は現状待機させていただきます」

「ちえー、二人ともお堅いなー」

ま、一筋縄でいくとは思っていないからこれも予想通り。とりあ
えずは引き下がる事にする。

「こーんなにおいしいのになー」

これ見よがしに言いながら手酌で一杯。うん、労働の後の一杯は
最高。

「あの……司令。浴衣で胡坐はやめて下さい」

「えーなんでー。破目外してって言つといたじゃない」

続けてもう一杯。んーんまーい。

「破目とかの問題ではありません。妙齡の女性がする格好ではない
と言ってるんです」

「その妙齡つてのは、妙な年齡つて事かな？　それとも嫁に行くに
は微妙な年齡つて事かな？」

「またそんなこと言つて……司令はまだ20代じゃないですか」

「そう、まだ20代なの。つまりいずれ30になるの。そうなつて
からじゃ遅いつて事なのよー」

流石に嫌そうな表情をするみのりちゃん。そりゃそうだ。

「みのりちゃんだって他人事じゃないのよ？　今はまだ若いけど、年なんてすぐに取っちゃうんだから。ね、勇人くんだって私みたいなおばさんより若い娘の方が良いでしょう？」

「えーと、よくわかりませんが司令は魅力的だと思います」

……おお、意外な答え。こういう時にはこう言えというみのりちゃんの教えの賜物か、或いはみのりちゃんと接してるうちに自然に学習したのか。でも、そうだとしたらここでその答えは逆効果な訳で。

「……勇人？」

「はい！」

冷たいみのりちゃんの声に勇人くんが硬直する。あーあ、やっぱり。

「別に、貴方が誰とどうしようと干渉するつもりはないけど。でも、あまりあちこちに色目使うのはどうかと思うけど？」

「いえ、違います！　そう言うのではなくて……」

「前の時はあんな小さな女の子にまで鼻の下を伸ばしていたし？」

「いやいやいや、そんな事は決して」

うん、これはなかなか面白い。素直になれないみのりちゃんと、状況が全くわかって無いけれどとにかく謝りまくる勇人くん。そのわかってないところに更に腹を立てるみのりちゃん。

「いいのよ、別に私には関係ないし？　勇人だってそろそろ責任取れる年齢だし？　むしろそういう相手のひとりもいた方が色々考えるようになって成長するかもしれないし？」

やっぱり素直じゃない。傍で見ている分には面白いけど。

「だからそんな事は全く無いです」

勇人くんの弁解も全く無視。ま、わかった上で言いがかりをつけているだけのだから、弁解とか聞く必要もないのも確かだけど。

「ふん」

喋り疲れたのか苛立たしさのせいか、みのりちゃんは手元のコッ

ブの中身を一気に飲み干した。にやり。

「……っ、司令、これは」

今頃気付いても遅い。中身をすり替えておいたのだ。みのりちゃんがお酒に強いのか弱いのかは知らないが、少しでも心理的抑圧が無くなって素直になってくれたら大成功。

「あはははは。まあまあもう一杯」

間髪入れずにみのりちゃんのコップにお酒を注ぐ。断られると思っていたのに、みのりちゃんは黙ってそのお酒を一気に空けた。

あ、ちよつとまずいかも知れない。人格代わってるっぽいかも。

「勇人。そこに座りにやさい」

舌が回ってない。でも迫力はいつも通り。いや、目が据わってる分、いつもより怖いかも。

「はい」

勇人くんが慌てて居住まいを正す。最初から座ってる、なんて突っ込みを入れられる雰囲気じゃない。

「いい、勇人。貴方は考えにやさすぎるの。ほんと私は私にやにをおこってるのかわかってにやいでしょ」

「……すみません」

「あやまればすむとおもってるわけ？ ん？」

ははは、絡んだ。面白い。心配は心配だけど。

でも我慢せずに絡んでるって事は、少しは素直になれてるって事かな。

「いつもそうでしょ。びくびくして、そんなに私のことこわいによ？ ん？」

ふらふら、とみのりちゃんが立ち上がった。あー、危ない危ない。「まえからずつといおうとおもってたによ。だいたいあにやたは

……」

と言ったところで、ふらふらしてたみのりちゃんの動きが止まった。なんだ、急に立ち上がったから、酔いが回ったか。

「う……」

みのりちゃんが呻く。これはヤバイ。

「う？」

それがどういう意味か分からず鸚鵡返しに聞き返す勇人くん、えーとなんというか。

これ以上はお話できません。勇人くんもみのりちゃんも、あまりに不憫過ぎて。

えっと、二人ともごめん。

3 - 4 予兆1

私の名が『絶望』だからといって、私自身が絶望しているという訳ではない。

死神は死を運ぶ。同様に、私は絶望をもたらすのだ。

人間に絶望をもたらし、そして死ぬ。それが私が造られた理由だ。それ自体には何の感慨もない。道具は道具として使われるために存在する。まして、私は兵器なのだ。兵器は壊される事を前提で作られる。どれほど頑丈に作ったとしても、所詮は使い捨てられるために造られるのだ。私は兵器として使われ、兵器として壊されるべき時も定められている。

私が造られた理由にも、道具として使われる事にも、使い捨てられるという事実にも、なんの興味もない。

だというのに。

あの男は私に向けて操縦席の扉を開いて見せたのだ。

あの男にとつて、私はただの障害に過ぎない。単に蹴散らして行けば良い筈だ。

それなのに。

あの男は私に向けて操縦席の扉を開いて見せたのだ。

私が操縦席の扉を開けたのは酔狂に過ぎない。むしろ、そのまま潰される事を望んでいたのかも知れない。それなのに……あの男は、自分も操縦席の扉を開いて見せたのだ。私が開けたからという、ただそれだけの理由で。『災厄』の瘴気にその身を晒してまで。

それで、わからなくなってしまった。

私は道具なのだ。ただの物だ。

なのに。あの男は私を対等な存在として扱ったのだ。

私は、知りたい。知らなくてはならない。

私は、あの男から見て、どんな存在なのか。

私は、一体なんなのか。

だから。今、『奴』が宴席を抜け出してひとりになった瞬間を狙って接触を図っているのだ。

こんな場所に来るのは初めてだ。いや、出撃以外で外に出た事すら初めてなのだ。

そして何よりも、武器を身につけていないというのが落ち着かない。極限までの遺伝子操作を受けた私を害せる存在はそうは無いと知ってはいても、何故か心細い。無意識に手にしたものので身体を隠そうとしたが、意思で押さえる。この程度のもので身を守る訳が無いし、喻え僅かでも戦意を思わせる行為は今では相応しくない。

『奴』は今、こちらに背を向けた状態で極度にリラックスしている。その気になれば、次の瞬間には縊り殺すのも容易い程に。

「邪魔をしても良いだろうか？」

湯気越しに声をかける。はじけた様に振り向いた奴は……そのまま鼻血を噴いて倒れた。

「鼻血を噴くほどのぼせたか？ 湯船を汚してはいかんだろう？ 様子を見ようと奴に近づこうとするが、

「な、なんでこんなところに女の子が！？」

湯の中だというのに驚異的な速度で後退る。思っていたよりも身体能力が高いのか。今の速度は私にも勝る。

「入り口の張り紙を見なかったのか？ この時間は混浴だ」

確認したのだから間違いない。この露天風呂は時間制なのだ。戦う以外は知らない私にも、流石に男湯に入っではいけないくらいの知識はある。

「じゃ、じゃあ俺はそろそろ出るから！」

それでは意味がないのだ。

「貴様も来たばかりだろう？ 温泉まで来て早風呂は無粋だ。ゆっくりと浸っていけ」

無理に逃げようとしたらとり抑えるつもりだったのだが、奴は出て行くことはしなかった。というよりも、こちらを向きすらしない。

逃げる気配が無いのを確認してから、私は湯の中へ体を沈めた。

身体を清める手段は軽いシャワーしか知らない私には、湯に浸かるというのは初めての経験だが、悪くはない。体が火照る感覚は不思議だが、不快感はなかった。

「そんなに硬くなるな。初対面という訳でもあるまい」

「……初対面じゃない？」

勇人は首をひねった。向こうを向いたままで。まさか、私が誰なのか気付いていないのか？

「あ、あーそうか、幼女だ」

「だから、幼女言うなと」

「そっか、驚いてて気付かなかったけど、その髪と瞳の色は覚えている。人形みたいで可愛いと思ったんだ」

楽しげに言う言葉に戸惑った。可愛いだと？ 『絶望』である私を捕まえて、しかも普通なら奇妙に思われる筈のこの容姿を可愛いだとは。私を造った者達からですら、気味悪いという視線ばかりを受けてきたというのに。

だが、そう言いながらも勇人がこちらを向く気配は無かった。

「話をしようというのに、そちらを向いたままというのは無いだろう。こちらを向かんか」

「だ、だったら、せめてタオル巻くとか何とかしてくれ！」

おかしい事を言う。

「湯船にタオルをつけてはならないということくらいは知っているぞ。それに、風呂場には『裸の付き合い』という言葉があるそうではないか。お互い丸腰であるところを見せ合って敵意の無い事を示すという」

丸腰、のあたりで奴が一瞬ふらつとした。丸腰、に何か思うところでもあるのか。

「前回、戦う前に操縦席を開き合っただろう。あれと同じだ。前は私が先に開けたからな、今度はお前が先に入っているところに私が入って来た。これで対等だ」

「そうじゃなくてだな、女の子は男に裸とか見せちゃいけないんだって！」

「気にするな。そもそも、私達は敵同士なのだぞ？ その相手が武器を持っていない事を確認できる状況を放棄する理由は無いだろう」「だからって、隠すくらいはしろ！」

「そうはいかん。タオル一枚あれば刃物を隠すくらいは造作もない。それでは誠意にならん。取り合えず、今は湯に浸かっている。見えはしないと思うが」

その言葉を聞いて、勇人は恐る恐ると言う様子で振り向いた。私の姿を確認して、ほっとした様子でこちらに向き直る。それでも視線を下げる事だけは決してしなかったが。

「向こうを向いたままでは、私がいきなり襲い掛かりでもしたら自分の身も守れないだろうに？」

「え……何が？」

勇人は一瞬言葉に詰まるようにしてから言った。

あっけに取られた。命のやり取りをした相手に背中を向けるその神経にも驚いたが、自分の身に危険が及ぶ可能性すら考えないとは「貴様は……自分の身の危険を、心配しないのか？」

「だって、今は敵として来た訳じゃないんだろ？」

今度はこちらが言葉に詰まった。確かにその通りだ。自分でもそう言った。しかし、だからといってそれを信じるとは。

「『敵』が存在する以上、戦は戦場のみで起こるとは限らんだぞ」「だって、敵なんていないから」

「……何？」

絶句した。二度の戦いを終えて、実際に今こうして私と対峙しておきながら、「敵はいない」だと？

「これは随分と異な事を言う。実際に戦っておきながら、敵ではない、と？」

「いや、だって俺戦ってないし」

「……何？」

言葉の意味を捉えられずに絶句する。あの機体に乗っているのはこの男だ。その筈だ。

「んー、俺バカだから説明するの難しいんだけどさ。例えば、真っ直ぐに進みたいのに、正面に壁があるとする。それをぶっ壊さなきゃ進めないなら、ぶっ壊すしかないだろ？」

「ふむ、つまり私は障害物に過ぎない、と」

なるほど、心構えの問題か。それは同時に私を物としてしか扱っていないという事。わざわざやって来て、した事といえば自分がモノである事を再確認しただけか。

それはそれで私に相応しい。これで迷いを消す事が出来る。

「んつと、それもちよつと違うんだけど、……いや、違わないのか？ えつと……俺はバカだからさ、相手が何かとか誰かとか、正直どうでもいいっていうかわかんないんだよな。だから、俺の前に立つ奴は全て壁だ。だからぶち破つて前に進む。それ以外考えてない」
「だが、戦う前に私に礼を尽くしたではないか。ただの障害物相手ならば、そうする理由はないだろう？」

「だって、壁とか言う前にお前はお前だろ？」

何を言いたいのか捕らえきれない。これは恐らく私が戦い以外は出来ないということが原因ではない筈だ。

「……待て。混乱してきた」

「俺にだってわからないぞ。わからない時は考えないのが一番だ」
まるでそれが当たり前のような口調で言う勇人に更に戸惑う。

「随分と気楽なのだな」

「人間、考え過ぎるとろくな事にならない。考えてわからなかったら、感じた通りにするのが一番だ」

得意気に胸を張る勇人に軽く眩暈を覚える。威張って言う事ではないだろうに。

「……先に識る者プロメテウスに乗る者の台詞とは思えんな」

「だからだよ。考えるのは他の誰かがやってくれる。プロメテウスが出動できるのは、博士や司令が準備してくれるからだ。だから、

俺がやる事は信じる道を突き進む事だ」

「考えないのならば、信じた道が間違っているかも知れないだろう？」

「だからこそ直感を信じるんだ。みのりが……みのりってのは俺の幼馴染なんだけどさ、教えてくれたんだ。『勘つていうのは、むいしきかでぜんちしきをどういんしてはんだんしたもので……』えと、『りくつがつかないのはじょうほうりょうがおおいからけいとうだつていないから』……だっけ？ って」

丸暗記したことを棒読みするように言う。多分その通りなのだろうが。

「ふむ、成る程。直感とは、つまり深層で考え抜いた末の結論であるから、それ以上表層で上辺だけの理屈を並べても結論は退行するのみ、か」

「そうそう、よくわからないけど」

「わかさんのなら、軽々しく頷くな。だがな、直感は完全ではない。間違える事もあるだろう。その時はどうする？」

「だとしたら、それは間違ってるって事実の方が間違ってるんだ」

「……何？」

「例え周りの全てがそれが間違いだと言ったとしても、俺は信じる。自分の判断をじゃない。信じると決めたものをだ。例え間違った方向に進んでたとしても、地球を一周すれば元の場所だ。それはつまり、間違つてないって事だろ？」

「……元の場所に戻るのであれば、つまり何時まで経っても正解にはたどり着けないという事だが」

「……あれ？」

勇人は首を捻った。分かっていたいなかったらしい。それとも考えていなかったのか。

「こういう時は確かこう言うのだったな。……あえて言つぞ。貴様、バカだろう？」

「あはは。キツッ！」

「……だが。心地いいぞ、そのバカさ加減」

私も、考えていなかった。考えなかった。しかしそれは信念から来る確信によるものではない。そう造られたのだから、そうあらねばならないというだけの、思考停止。

「……頭使ったら、のぼせてきた」

「使ったという程は使っていないが」

しかし、長湯をしてしまったのも確かだ。加減のわからない初めての風呂で無理をするのも良くないだろう。

「そうだな。私もそろそろ上がった方が良さそうだ」

少し名残は惜しいが、湯から上がろうと私は立ち上がった。

勇人は何故か再び鼻血を噴いていた。体の弱い奴だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3600k/>

希望という名の絶望

2010年10月11日11時52分発行